毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢



明治二十九年六月十日發兌

第七拾九號

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼

スコット乳菓の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したるが最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に**虚弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を瘦せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば橫濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す

左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

橫濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

英國 ギッビンス氏著
日本 水上梅彥譯

新刊發賣

英國產業史 下卷

定價十五錢
郵稅二錢

鮮明なる銅版地圖挿入

下卷目次

第五期 產業革命及近世之英國

第一章 革命の曉
第二章 大發明の時期
第三章 戰爭、政治及工業
第四章 製造所制度及其結果
第五章 勞働社會の狀態
第六章 近世農事の興廢
第七章 近世產業上の英國

好評を得たる英國產業史上卷に次で今其下卷を出す、譯者は盛譽ある原著の一字を減ぜず一語を加へずして譯述せんとを務たり

若し夫れ宇內獨步の富强を獲たる近世英國の農、工、商業の急進、革命を知らんとし外交と產業の反照する所以を知らんとし戰爭と勞働者の關係を知らんとし兼ねて極東の新日本を扶植するの道を知らんとせば英國產業史下卷を一讀せられよ

發行所 民友社
東京市京橋區日吉町四番地

THE TWELVE MEN OF LETTERS

十二文豪

號外

シルレル

緒方維嶽著

定價十八錢
郵稅四錢

獨逸近世の二詩星は、ゲーテとシルレルなり。前者は邦人多く之を說く。後者は未だ人の傳し、評論したるものあるを聞かざる也。

シルレル何人ぞ。彼れが文學上の產物は、能く幾莫か詩神の寵愛を蒙れるか。能く幾莫か光大超逈の理想を發揮したるか。其哲學は如何。其歷史は如何。其詩篇は如何。其戲曲は如何。此書は此問題に答へんが爲に、其著作を審讀し、其人物文學を評論したり。
著者が此書を著はすや、初め其傳記を誦し、大に其盤根錯互せる生涯に同情し、悲慨限りなく、興味限りなき爽快限りなき感嘆を發したるに依る。

シルレル四十五年の生涯、僧侶たらんと欲し、醫學生たらんと欲し、英國に去り、米國に走らんと欲し、遂に其天職を覺悟し、詩人の最大光榮を冠するに至る。其間出奔あり、失戀あり、厭世あり、流浪者と成り、推拓者と爲り、勝利者と成る。多情多感、妙思麗趣溢る。

若し夫れ敍字文章の巧拙、着眼立論の高下に至ては、讀者幸に是れが淸判を下せ。著者は深く唯シルレルに感嘆し、シルレルを未知の人に紹介せんと欲するに急なるが爲に、此書を出せるのみ。微意の存する所實に茲に在り。敢てシルレルを傳ふと云ふに非ざる也。

⊙早稻田文學評　『シルレル』『十二文豪』の號外なり體裁すべて他の號に同じ、文章も結構も、はた其の出來榮も、他の號に比して、伯仲の間と評すべし、總じて『十二文豪』の最長所は、其の文の花やかにして言ひまはしの巧みにして、多少の直譯的文病あるに拘らず、一たび卷を開く者をして、知らず〳〵全卷を讀了せしむるの才藻にあり、而して此の篇の如きは此の長所を具へたるが上に、諸書を參照せられたりと見えて、主人公が性行、著述に關する評論も(語に泥まずして意を酌めば)おしなべて穩當中正、此の書はた靑年社會の文庫中に列すべきもの

⊙文學界評　十二文豪の號外として民友社より出版せられし「シルレル」は緖方維嶽氏の新著なり。こは同氏の處女作なりと聞けど筆趣淸新同情湧けるが如く、風土人情歷史等趣味全く異なれる西洋の事物を材にして讀者の眼前に彷彿せしめ毫も雕造の痕をとゞめず。此著シルレルの學殖と彼が詩品の高位地を傳ふるに於て、或は彼が美術上の意見を評するに於て、彼が自然觀を寫すに於て、猶一層の研究を要すべきものに思はるれど、詩情彼の如くにして、敬虔、彼の如き人物を傳ふに於ては著者はたしかに有益なる成効をなせり。一卷の十二文豪豈にゲエテを盡さんや、豈にシルレルを盡さんや、著者いよ〳〵勉めて止まずんば其造詣また知るべからず。請ふ勉めよや。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

英國 ギッビンス著 日本 水上梅彦譯

英國産業史

上卷

鮮明なる挿圖四葉入

定價二十五錢

郵稅四錢

◎東京朝日評　英國ギッビンス氏の原著を譯せるものにして本卷はノルマン種族占領前より十八世紀の中葉工業革命の劈頭に及ぶ乾燥の弊に陷り易きものたるに係はらず却て趣味の津々たるは悦ぶべし◎日本評　英人ギッビンス氏の原著を水上梅彦氏の譯したる者なり本卷叙述する所凡て四期にして那耳曼種族占領前の英國より自十六世紀至工業革命劈頭といふに到る實業家の一顧を値すべし◎教育時論評　本書は、英國ギッビンス氏の原著を譯せしもの、第一期には、那耳曼種族占領前の英國、第二期には、自那耳曼人戰勝至顯理三世治世、第三期には、第拾三世より第拾五世紀に至る、第四期には第拾六世紀より工業革命の劈頭に至る産業上の沿革を叙述し、讀者に一種の趣味を覺えしむ◎時事新報評　英國産業史は英國ギッビンス氏の原著を水上梅彦氏の翻譯したるものにて第一期より第四期までを上卷とし民友社より發行したり定價は廿五錢にて紙數二百頁◎日々評　英國ギッビンス氏の原著にして歐洲に於て喝采を博せる近時の好書なり第一期那耳曼種族占領前の英國第二期那耳曼人戰勝より顯理三世に至るの第三期第十三世紀より十五世紀に至る第四期第十六世紀より工業革命の劈頭に至る間に於ける英國商業上に生起せる大事件を叙述せり譯文は例の民友社獨得の雄健流麗壯快なる筆乾燥に陷いるの弊を避て巧に原意を寫せり唯々譯者少しく卒業を急ぎ間々省略に失せるが如き迹あるは遺憾なれども大意に於ては充分譯出して决して杜撰の點なきは亦多とすべき也

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

稻垣滿次郎述

外交と外征

定價十五錢　郵税二錢

我が日本が百戰して獲たる遼東半島を返還せしめたる三國同盟は如何にして出來たるか。三國同盟の目的は那邊に在るか。東洋に於ける歐洲の外交は如何。日本將來の外交は如何。此の疑問に對へんが爲に歐洲近時の外交を叙述し來りて日本將來の外交に指針を與へんとす

古人は何の爲めに戰ひしか。昔人は何の爲に戰ひしか。今人は何の爲に戰ふか。將來は何の爲めに戰ふべきか。此の疑問に對へんが爲め外征進化の大勢及其應用を叙述し來りて日本將來の外征に指針を與へんとす

外交と外征、要するに日本將來の對外思想に向て其到着點を示さんとするに外ならず方今外征、緒に就きより、外交の局面、緩ふせんと欲して愈々逼迫し來る情なきにあらず、國民の對外思想を要する斯の時より緊切なるはなし。今我が社が斯の書を出版する、此の時務の急に應ぜんとするに外ならざるなり

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

少年傳記叢書第三卷

リンコルン

定價十二錢　郵税二錢

リンコルンは米國の英傑なれども、寧ろ世界の偉人なり。其傳記は生ける自助論なり。其一生は平民政治家の最大摸範なり。森林の貧兒より起りて北米合衆國の大統領たるまでの經歷は、世の少壯者が讀んで尤も趣味を感ずる一代記なり。米人は呼んで『父リンコルン』と稱し、黑人種は讃へて『世界の自由の友』と呼ぶ。今や此偉人の一生は益々其光輝を加へつゝあるなり。本書は主として其幼年より青年に至り、苦學より立身に至るまでを詳記したれば、少壯者には殊に面白く讀まるゝことゝ信ず。

「東京朝日」評　曾て北米合衆國大統領たりしアブラハム、リンコルンの傳は少年傳記叢書第三卷として出でたり此人の傳記に於ては殊に愛讀すべき面白きふしあるを見るなり

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社會叢書 第五卷

資本の活用

定價十錢 郵税二錢

茲に十圓の資本を有するものあり、百圓、千圓、萬圓の資本を有するものあり、如何にして此資本を活用すべきか、資本は到底死物なり、人の力によりて始めて動かされ且つ活かさるゝものならずや本書は理論と實際とによりて如何にせば資本を運用活動すべきかを説明して事業家の一粲に供し且つ其實行を促す即ち章を分ちて四となし、（一）『資本の活用』に於て資本の活用を概論し（二）『個人の投資』に於て詳細に其活用方法の道を講し（三）『共同の投資』に於て數人共同の資本を以て事業の計畫及其得失を論し（四）『資本活用家』に於て最も手近き資本活用家の實例を示せり

◎「毎日」評 資本の活用は例の民友社の清楚なる袖珍書なり全篇平易なる筆法を以てして而も流麗快讀せしむる振假字附の好讀本たり章を別つ四資本の活用、一個人の投資、共同の投資、資本活用家等簡明にして周到に説述せらる末段安田澁澤紀伊國屋守田大倉等當代富豪の行爲を描きて摸範とす讀むで滋味あり以て世を益する多々なるの書乎

◎「都」評 社會叢書の第五卷として發行せり資本活用家の實驗談をも添へたれば多少に拘はらず資本を有するものは此小冊子を讀め

◎「報知」評 本書は社會叢書の第五卷なり資本は活用せざる可らざるを説き活用すべき事業の概畧を擧げ之を活用するに就ての心得を述べ進みて安田善次郎、澁澤榮一以下之を活用したる人士の小傳を説けり簡にして能く要を盡くせること猶ほ他の社會叢書の如し

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

新日本之青年

第九版成る 定價二十錢 郵税四錢

新刊 第七 國民小説 定價十五錢 郵税四錢

新聞「日本」の批評に曰く『第七國民小説、民友社發行、國民小説は追々價値を落すなり本卷の如き更に讀むべきものなし徒に頭の數多きのみ』「毎日」は曰く思軒居士の『寛政世界環航者』は例の森嚴なる筆鋒を以て面白き史談を書したれば愛讃するに堪へたり、櫻痴居士の『義經仁義主汗』の兎も角も老練なる、眉山の『うらおもて』が一時文壇の小波瀾を捲かしめたる、嵯峨之屋の『嫁形氣』『この馬鹿』の情致流動せる、松葉子の『脱營兵』湖處子の『自然兒』など面白く華やかなる作物集せらる、蘆花生の『恐ろしき一夜』は吾人が今に於て初めて讀みたるものなるが筆鋒熱血迸り愛誦すべき好短篇なり

一貶一褒、發兌者其當否を知らず、眞の價値は眞の讀者の清判を以て決せん。粗讀者は粗批判者也、讀まざる妨けず。

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税
一冊	金五錢	金五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	地方共金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	同金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 吉崎圓吉
編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿九年六月十日發行

家庭雜誌第七拾九號

目錄

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第七拾九號
(明治廿九年六月十日發兌)

社説

家政の要

家政の要は節儉を始とし、節儉の要は廢物利用を本とす。

古人も衣食足りて禮節を知ると申されたりき。獨り禮節のみにあらず、萬事家政の安固にして生活上復たす毫の顧慮を要せざるにあらざるよりは十分に之を成すこと能はざるものたり。若し家政にして安固ならん乎、人々能く其心を一にして事に從ふを得べきのみならず、第一に心身の獨立自由を全ふし、所謂浩然の氣をして常に充たしむることを得る也。

故に家政の安固なることは、則ち人の世に立ちて獨自一個を保ち志業を成すの基たると共に、嘉言善行も竟に此の中より生ぜずんばあらず。貧すれば鈍する人の情として、亦家庭安和なれば慈悲の心も自づと起るものぞかし。

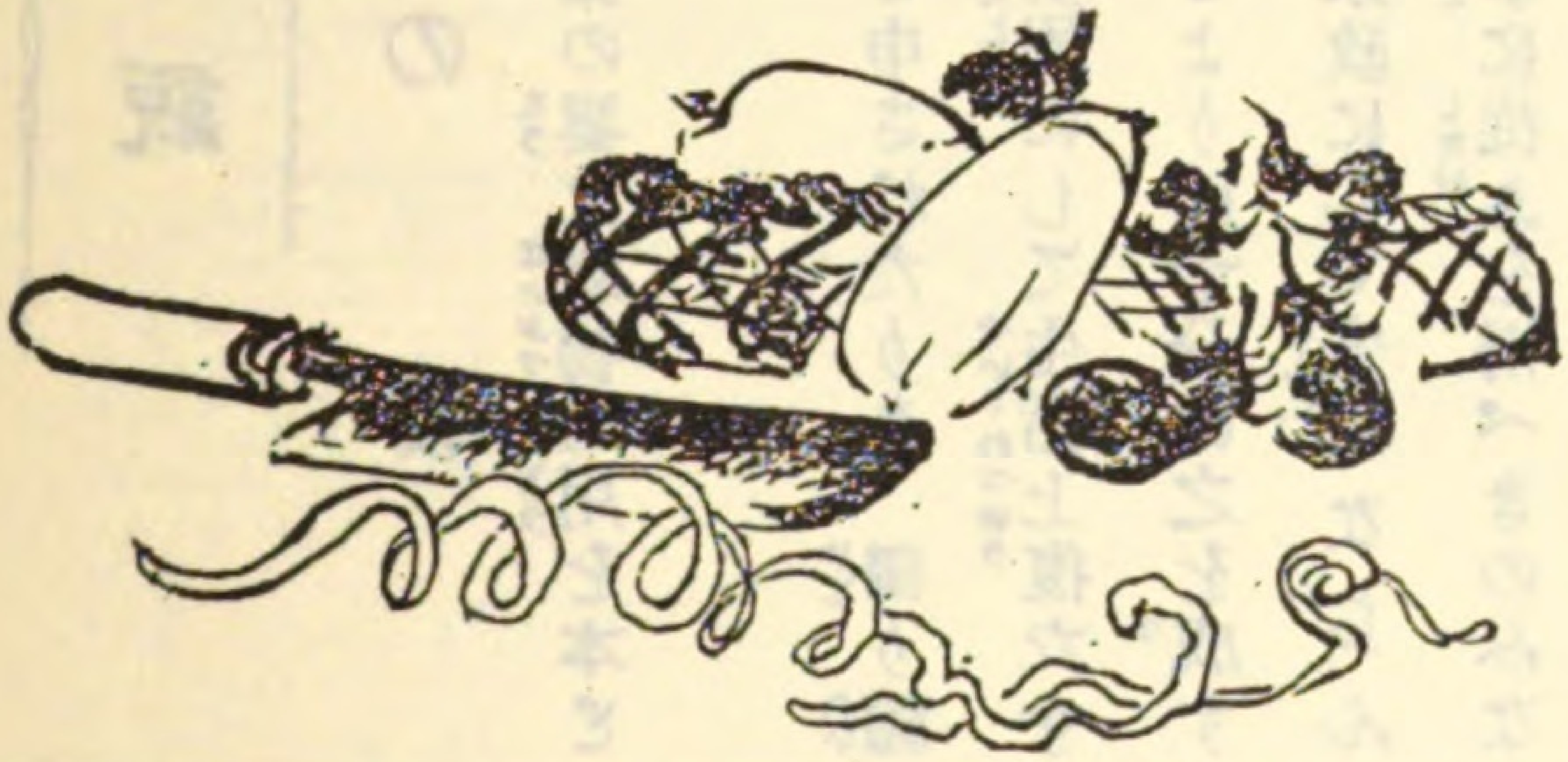
然らば如何にして所謂家政の安固を保つべき乎といふに、言ふまでもなく節儉を其始とす。人情儉より奢に赴くは易く、奢より儉に入るは難し。人の世に在る、禍福吉凶糾へる繩にも似て、一浮一沈測り難きものなれば、得意の時にも失意の時にも依然として家政の安固を持續せんと欲せば、先づ出來得るだけ其家政を小にせずんばあるべからず。即ち節儉以て自ら持せざるべからざる也。

事業の大ならざるは則ち耻づべきことなれども、家政の小なるは毫も耻づべきことにあらず。

事業の爲には一擲萬金も顧みざるべきと共に、家政の爲には十錢の買物も三考したる上ならでは決行すべか

らざるは、家政主理者の宜しく意を用ふべき所にあらずや。

去れども新に買ふべきものは何人も注意し易しとする所にして、少しく意を用ふれど多少節倹し得ざるにあらざれども、已に一たび使用を終へたるものに至ては人多く意を留めずして之れを棄るもの也。安くんぞ知らん、節倹の要は却て常に大なるものにあらずして小なるものに在り、新に求むべきものにあらずして將に棄てんとするものに在ることを。言換ゆれば最も重く廢物利用の上に在ることを。



天正文祿の頃今張良と呼ばれて何人も知る所の黒田如水は、常に家中の諸士を戒めていひき、我等家來どもは伊達も藝能も入らず、平生はつゞれを身に纏ひても、いざと云ん時武具馬具人數の用を缺かずして、傍輩に後れざる樣乘り出すを武士の藝能と思ふぞと。

左れば彼は諸士の中すりきりたると聞けば、嚴しく叱り、少しは貯へありと聞けば利發ものと譽め、身を以て之に先ち、平生最も無益に物を費し、又何品にても廢りになることを嫌ひたり。

瓜の熟する頃家中又は町人より多分の瓜を差上げけるに、小姓伽坊主等を召して之を與へ、其皮は成るべく厚くむき候へと命じ、臺所賄人をして其皮を鹽漬にし置かしめ、臺所にて飯を喰ふに菜のなきものに取らせよと申付けき。

瓜のみにあらず、茄子其他の皮も同樣にし、野菜ものの切れはづし魚の骨なども同じく捨てさせずしてそれぞれに拵らへしめ、特に可笑しきは、澁柿の落る時に

澁を作らせ、平生諸方より來りし書札又は紙包の類を出し、大小姓兒小姓馬廻りの諸侍に至るまで手明のものに命じ、箱、籠の類を張らせて澁を引き、其小さき紙片は裂て小よりとなし、又喰裂きたる紙のはしの口にたまりたるをば板に吹き付けしめ、而して之を壁を塗る時の白土のつたとなさしめたりとなん。

其廢物利用此くの如く其節儉實に此くの如くなりしに係らず、公用若くは家來に物を遣はす時の如き、多く金銀を散して毫も吝む所なく、常に云へりき。我等が平生たまかにしまつをするは、下々に物取らせたく思へばこそためをく金銀也、遣ふまじきものなれば金銀にてはなく、石瓦も同じ事也、貯へても詮なしと。

是を以て其家中の士は、自ら風をなして驕奢の弊なく、各自多少の財を蓄へ武器を整へ、人馬を養ひ、以て一旦事あるの時を待てり。彼が關が原の役、若し合戰百日にも及はゞ九州より切て上り天下を争ふべしといひたりと傳ふる如き、其素養する所見るべきにあらずや。

貧となく、富となく、賤となく、貴となく、古より事をなして縱橫自在ならんと欲するものは、先づ其家政安固にして、何時にても之をなすに決して事を缺くことなきものならざるべからざること此くの如し。而して家政の安固は節儉を始めとし、節儉は廢物利用を先とすることも亦此くの如き也。願ふに是れ何人も知り易しとする所にして、竟に行ひ難しとするの所。要は其知り易きを侮ることなく、其行ひ難きを難かることとなくして、之を行ふに在るのみ。道は近きに在り、却て之を遠きに求むるの愚をなすこと勿れ。

徳川家宣心のをしへ

◎心に物あるときは体窮屈なり、物なきときは心廣く体ゆたかなり

◎心に我儘あるときは愛敬を失ふ、我儘なきときは愛そなはる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◎心に慾あるときは義を思はず、慾なきときは義を思ふ
◎心に飾あるときは僞をかまふ、飾なきときは僞なし
◎心に傲あるときは人を侮る、傲なきときは人を敬ふ
◎心に私あるときは人を疑ふ、私なき時は疑なし
◎心に過ある時は人を恐る、過なき時は恐るゝことなし
◎心に邪見ある時は人を害ふ、直なる時は人をそこなはず
◎心に貪あるときは人に諛ふ、貪なきときは諛はず
◎心に怒ある時は言葉あらし、怒なき時は言葉柔なり
◎心に堪忍なき時は心を害ふ、堪忍ある時は物を調ふ
◎心に優なきときは悔多し、優ある時は悔なし
◎心に自慢ある時は人の善を知らず、自慢なき時は善を知る
◎心に賤しき時は願おごる、賤しからざる時は願なし
◎心に誠あるときは分に安んじ、誠なきときは分に安せず

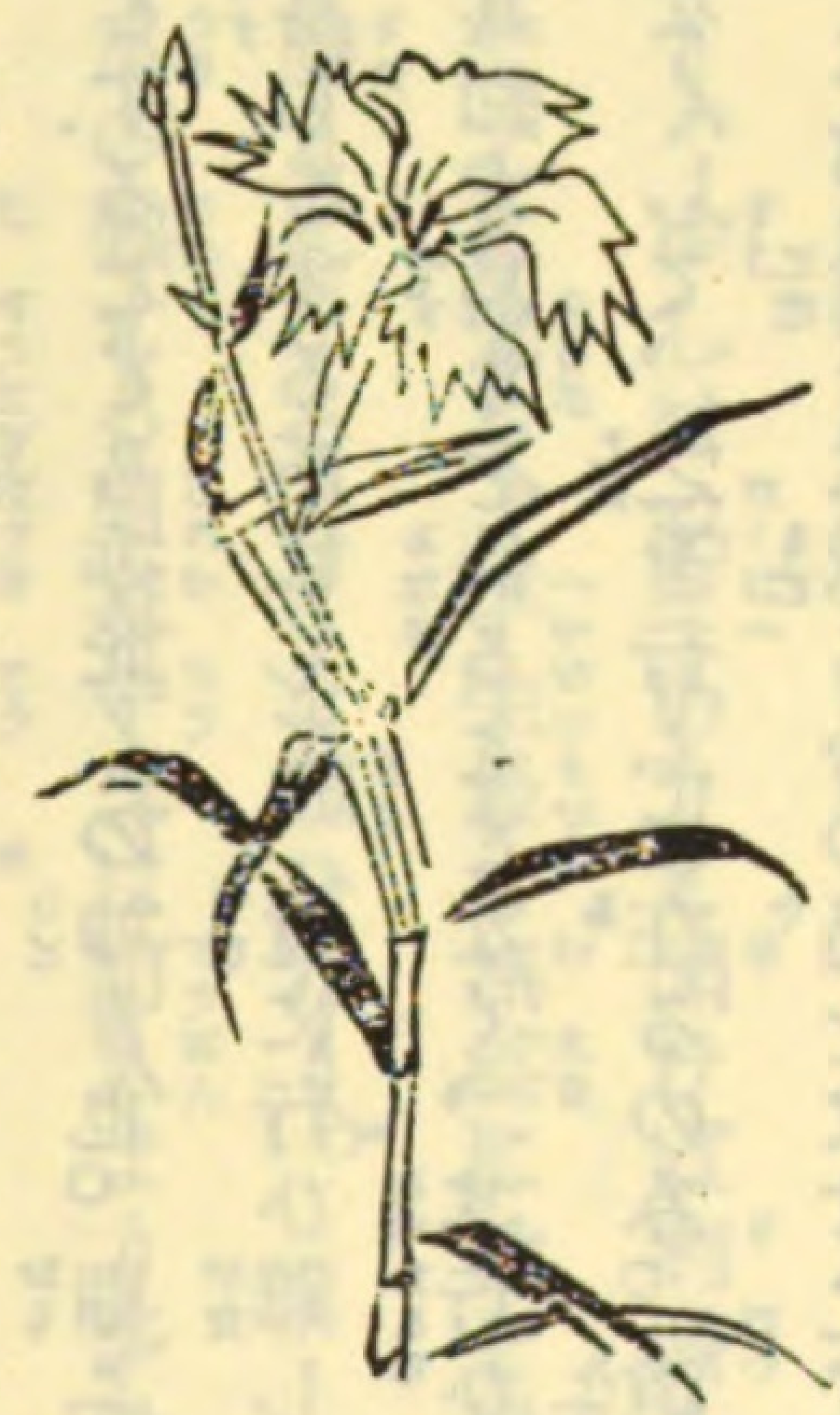
草の葉の程々に置け、露の重きは落る世の中

科學

植物

石竹　松ヶ枝

石竹はその花の色の美はしきによりて古へより多く詩歌に詠ぜらる殊に歐米人はこの花を愛賞し意を注ぎて培養し花瓣色等に雅致なる變化を來たし頗る見るに足るもの多し彼の國には種類多く様々なる名稱を附しあれど本邦にて見る所謂石竹はその最も普通なるものなり



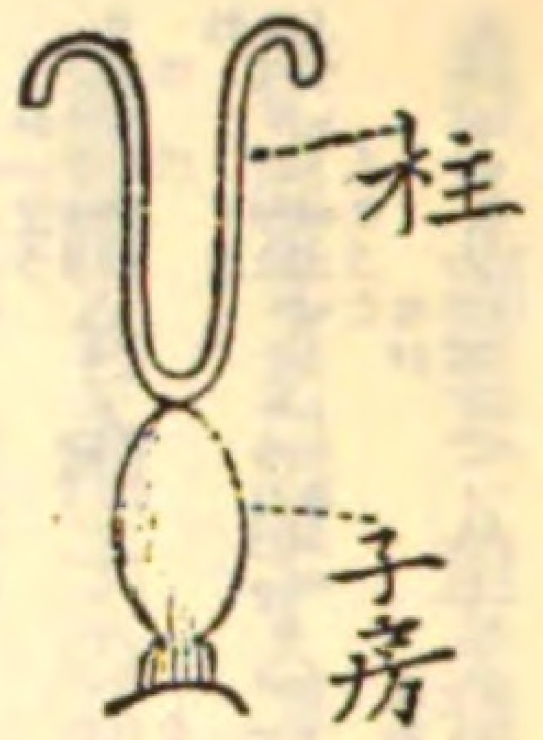
纖維に分離せる根端を持てる木質にして葉なく密接せる莖は上部亦數多の纏れたる枝に分れその枝上部の端に至りて一年草質の葉となるなり莖の各節には葉脈あらわれざる葉對生するなり

花

五箇の連接せる萼片より成る綠色なる萼は上端に至りて五つに裂け恰も壺の如き觀を呈し基底に於て二個或は三個の卵形なる苞を以て支えらる五個の花瓣は完全

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なる樣に排列せられその長き花梗を壺中に挿入して美はしき花冠をなす十個の長き雄蕊と二個の柱とを有し子房は唯一房なり



花蜜は細く深き萼の中に位するを以て唯だ蝶、蛾の如き長き舌を持てるものにあらざれば味ふ能はざるなり雄蕊は花の咽喉の處より出で丶通常先づ早く顯はれ訪ひ來る蛾、蝶の頭上に花粉を撒き散らして後ち凋み去れば忽ち二個の反曲せる柱現出し他の花より携ひ來らる丶花粉を受け取るなり(斯くの如き花も多けれど他の植物は又之と反して雌蕊の方雄蕊より早く成熟するなり車前の如きは即ち自己の雄蕊の出る一、二日以前已に早くその刺毛ある長き柱を突き出して他の花より花粉を受くるなり

外國にてはもと歐洲の南部アルプス山の近傍より蕃殖せし由或る書に見ゆ亞細亞の中本邦の如き溫帶地方には最も多く生ずるなり米國にても多く培養して至る所の園庭に見受けらる

「カルナーション」俗に所謂オランダ石竹と稱するは人工培養によりて花瓣を重複にしたるものなり注意して解剖すれば人工により實に不思議なる變化を來たらすを見る歐米にて培養するもの丶中には花瓣をして二十瓣の多きに至らしむるありと云ふか丶るものはその雄蕊各々四五に分裂し多少形ちを壞ると雖もなほ明らかに花瓣の形ちに向ふなり子房も三個になり第三の柱を有し萼も亦基底より分裂せらる丶に至るものあり植物學上か丶る常規以外の狀態を目して「トラボコジュー」即ち怪異と名づく

石竹をラテンの原語にて見れば「神の花」といふ意味ありこれその花の美はしきを愛で丶附せし名なるべし

石竹は單瓣複瓣の何れに係はらず若き嫩枝を切り剪む

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

によりて蕃殖せしめ得るなり
不純珪酸を含む砂礫、粘土、石灰炭酸鹽幷に植物の化土より成り立ちたる沃土は石竹の培養に最も適したる地なりと云ふ

苺

イチゴも亦種類多き果實なり或は蔓なるもあれば小さき木なるもあり又草なるもあり果實、葉の大小、色等に多少の異同はあれど等しくイチゴにして解剖上緊要なる處は同じき故今こゝに草イチゴ即ち今や漸く市の靑物店にその美はしき顔を出せる俗にいふ西洋イチゴを解剖せん

根と莖とは地下にあり然れども莖は時に至りてその頂きより長さ八寸許りなる細長き中空細圓筒形にして端に嫩芽の附生せる赤き纖匐枝を送り出すこの枝地に接するや下方根を發育し上方葉を養成せしめ以て一個の新らしき植物を見出すに至るなり

葉

葉面、葉柄、托葉の三部より成り立つ完全なる尋常葉なり葉面は掌狀三葉なり小葉は楕圓或は倒卵形にして葉緣は鋸齒狀をなすなり葉柄は多毛にして粗糙なる刺毛を有す



「植物の刺毛は面白き研究の材料を與ふるものなり或は單一なる長き細胞より成り立つもあれば又球を繋たる如く端より端に渡る幾多の細胞の透明なる網膜より成り立つもありその種類長短形狀等の差異到底數ふる能はざるなり時としては絨毛の如く柔軟密接に時としては鬚毛の如く堅く粗糙なり睫毛の如き纖をなすもあり或は絹の如き光澤を以て表面を飾るもあり或は鉤の如く後方に曲がるもあり蕁麻の刺毛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の如きは中空にして觸るれば恐ろしき苦痛を感ずべき毒をその中に包藏するなり春天楊柳の花（無數の花蕚簇生し以て一條の全躰を成すもの）を暖かに包むも刺毛、南米の原野にて輕く風に靡く一種の草大に風光を添ふるも亦刺毛の致す處なりかの有用なる綿絮すら種子の羽翼を生じたる刺毛なるを思はゞ實に面白き研究ならずや」

花　莖

は不規則に分岐して一簇の花總を造れど中心の花最も古るきを以て花序は中心先開なり即ち中央より外部に及ぼすの所謂なり而して花總は聚繖花なり

花

五箇の綠りの蕚片は五箇の同じ様なる互生抱花小葉に添はるゝを以て一見重複なる蕚或は十箇の蕚片を有する蕚の如き觀あり

數多なる雄蕊は雌蕊の周圍にありて恰も嵌め込まれし如く花蕚に固着するなり

果　實

は即ちイチゴなり大なる軟塊より成り表面には化したる多くの單雌蕊を有し植物學者の所謂眞正なる果實を形ち造るなり



花は咲き居る間は直方に葉の上に出でおれど果實となるや頭を垂れて半ば隱れたる風情にて熟するなり

イチゴは最も美味なる果實の一つにして新鮮なるものをさつと水にて清め牛乳と砂糖少量入れて食する時は大に氣を爽やかにするとて外國人の食卓には常に供せらるゝ處なり又この果實は以て「ジヤミ」を製するを得るなり

小さき斧も數々撃てば堅き樫を倒す（シヤクスピヤ）

史談

わしんとんの妻（一）

中野三鷹譯述

家貧しくて良妻を思ふと古人はかこてり、唯にそれ貧き身においてのみならず、順境逆境ともに善良の内助を要す、古往今來凡そ身を立て家を起し、一藝に達し或は一伎に熟し苟くも名を後代にとゞむる程の人にして妻の助を借らざるもの決して〳〵多からず、さればこそ我國の歌よみは松にかゝれる藤と咏じ、泰西の詩人は柏を纒ふ葡萄の蔓にたとへたり、晴天日朗かなる時にありては大いに其樹の古色を増し、怒風迅雷枝を打ち幹を倒さんとする日に於ては全力以て是を支ふ、彼我蓋し其意は一なり、七去三從などゝ無法なる言を以て兎角婦人をいやしめし支那の如きに於てすら疾に烈女傳の書ある畢竟は皆これがためにして、暗々の裡既に此理を説明せり、巨人傑士の傳を知らんとするもの必ずやともに其妻の傳を知らざるべからず、是其内外を併せ見るなり、故に余は此欄を借りてわしんとんが妻の傳を紹介す、讀者もしこれによりて初代大統領が内部そが百分の一をも解せば余は幸を感ずるなり。



ワシントン

夫人名はマルサーといふ、ダンドリッヂとて英國ウェルスよりの移住者にして、性質善良温和なる農夫、家道稍豊なる人の長女なり、今を去ること百六十一年即ち西曆一千七百三十五年五月今合衆國の一州なるボ



同夫人

ルジニヤに於て生る何事につけても不自由なき家庭の裡に樂しき月日を送り迎へ、やゝ成長の期に達せり。」讀者も夙に知るごとく其頃はいまだ今の所謂合衆國といふものなく、凡ての地方は皆そが殖民地として英國に屬し、派遣の官吏たとへば今領事の如ものありて、いづれの州にも其の役所を構へ、よろづ英國の指揮によりて支配せり、然して此の州に於けるものはウィリアンスバークといへる地に於て駐在せり、誠に弊風今に於て見るが如く其の所謂官吏なるもの丶我儘氣隨は殆んど至らぬ隈もなく、種々樣々と惡むべき事多き中にもとりわけて惡むべきは、彼等のいづれもそが生活の愉快を增し、且つは旅路の憂さを晴さんため、配下の民にせまりて殖民地至る處より美形の少婦を集め來り其が左右に侍せしむるの一事たり、《新紙によりて傳へ聞く我臺灣に於てもかゝる事のありしとかや、されども余は信ず、賢明なる大日本政府の役人の方々いかでさることのあるべき、其は何かの間違なるべし、されば讀者も決して信じ玉ふ事なかれ》因習の久しき遂に其の風をなし初には或は忌しといへども往々は更に怪しまず、當然の事と心得甚はだしきは名譽の事と思ひなすものさへあるに至りたり、《斯る事我多く田舎

地方に於て是を見る、立派なる物持の娘ども行儀見習と名づけて東京に出で或は官吏或は商家とそれ〴〵に口を求めて奉公することなり、然して在京二年又は三年、家にかへる時身に得たるものはそれ何ぞ徒づらに都人士の浮薄と驕奢の二つを習ひ得たるのみ、甚だしきは是によりていふに忍びざる結果を來し、女子一代の花の色を汚すことさへ少なからず、家庭改良の事に注意するものゝ尤も意を惹くべき事なりと思ふがまゝ、ことにふれて添書す》されば後來ワシントン夫人となりて令名今に傳ふ當年の少婦マルサーも亦そが十六歳に達するや、いりて其腰元となれり、然して其奉公すること漸えはらく、期終へて家に歸るや父母はもと軍籍にありしカスチスとて名聲資産ともに世に優れたる人の求めに應じて其結婚を約束せり、越へて一年黄道吉日を撰んで儀式一も滯らず、マルサーは嫁いてカスチス夫人となれり、誠に琴瑟相和して間もなきに早三人の子を擧げたり、夫カスチスの喜びはたとふるに物なく夫婦いよ〳〵睦まじく樂しき身と人も羨やむ程なりしを、實に天道は滿つるを欠く、其翌年の春とかや總領の子は墓なくも病の爲に倒れたり、平生左程健康に富まず且つ頗る神經質なるカスチスは此悲しみによりていよ〳〵ます〳〵其身を痛め、果ては病の床について惱むこと殆んど數旬、遂にはなき子の後を追ふて行けり。

長子去り夫も亦死せし寡婦の身程世にあはれなるものはなし、資産多きも決して〳〵慰さむるに足らず、殘る子二人ありといへども九十九頭の羊を捨て—迷ふかへらさる一頭を探すは萬人同じ心なり、况んやこれは其長子いかで殘りの二人より思ひ切ならざることのあるべき、誠に愛も希望も幸福も全然奪ひ去られて更にあとなし、こゝに初めて世の味氣なき事を知りしも去るものは日々に遠しとにや、まだうら若く且つは生

れ得快活なるマルサーの元氣は月日を經て後はいまだ嫁せざるの初めにかへり、紅粧美を盡して再び交際場裏にあらはれ、到る處に其權を握り、又時ありては多くの男女をわが家に會して夜宴を開くことさへも亦少なからざりしと吾人は聞く（此一事ワシントン夫人の傳記としては或はあまりに面白からずいふさへもやゝ忌はしき感なきにあらずといへども、如何せんこは多くの史家の傳ふる所疑ふべからざるの實說なり、されば決してかくすべきの事にあらず、其顏を描いてはいぼさへも殘さゞるこそ誠に畵師の勤にして、一言一行善惡美醜のけぢめなく、傳へ語らんとこそ苟も史傳をものする人の任なり）

夫人の傳を語るに當りてや必ずワシントンが事にも及ぼさゞるべからず、故に暫らくそを語らん。

元來ワシントンといへるは誠に戀にもろき男にして且また尤早熟の性質なりき、されば其幼時小學校にありし時すでに初戀といふ事を解し己れよりは年も三つ四つ增したる少女にむかひて眷々の情日々にいやまし、切なき胸の思をば、各種の詩歌（たとへば長歌に短歌に又は發句にとてもいふべきか）につくり、或は其手帳に又は敎科書の表紙などにかきつらね、又はそと其女にさへ示したりとぞ、然してそが所謂詩歌なるもの今も殘りて二三あり、もとより口調あしく修辭とゝのはざるはいふまでもなき皆これ戀愛の色にして優にやさしき節多し（我國のいにしへ八歲の兒の作り玉ひしといふ歌あり）（二つ文字牛の角文字すぐなもじゆがみ文字ぞと云々＝こいしくといふ意なり事に似通へるまゝこゝに記す）

然るに此少女は暫して人の妻となりしかばこゝに初戀に破れていと面白からず覺へしかば、何となく亞米利加に居ることさへも快よからず、海軍の水兵となりて國をさらんと欲せしも母の意によりて遂に果さず戀愛

も希望も共に空しく消失せて一つも其心を慰めんよすがもなく鬱々として日を送れり（其頃心置なき學友に送りたる詩の中に余もし彼の女を見ざる所に離れて住まんことを得ば如何に樂しかるべきにそれさへも叶はず憂は日々に身をまとふてふ詞あり）

少し心も慰さむやと義兄の住居せる地に至りてともに暮せる内に爰に於ても亦其義姉（義兄の妻なり）の妹と逢ふてはからずも亦キユピツドの矢にふれたり（キユピツドとは戀の女神の子にして裸躰盲目の童子なり、手に弓と矢とを持ち常に四方八方にむけて亂射す、元より盲目のことにしあれば何にあてんとの目的もあるにあらず、然して人もし其矢に觸ことあれば忽ちにして戀の爲に苦しむなりとぞ、是希臘古代よりの言傳へなり）

此戀も亦思ひ任せざるうちに義兄は病に倒れたりしかば一先は其あとを引受けて其家を治めたりしが間もなくして其家を去り或時は測量師となりて山野を跋渉又は人跡絶えたる地に起き伏し種々樣々の艱難を忍びて自から堅忍不拔の性を養ひ後來其大事業に當つて屈せざるの素をなせり。

此時に當りて今の合衆國の北方に於ける一帶の地に佛蘭西より來りて住める一群の移住者あり、然してそが爲に爰に來れる佛蘭西の官吏どもは次第々々と南方の地まで侵入し來りて、其政畧上多くの城砦を境の地に建て連ねんと企だて、いよ／＼チハイチの地まで來たりしかば英國人は（殖民地の人どもなり）いと快からず思ひ、一もはやくその鵬翼をふせぎとゞめんと志ざし、其が爲急に一隊の師を編制せり、然るに之をひきふるほどの人に乏しく、四方に其適任者を求めけることこそ實にワシントンが出世の始なり、折しも彼は二十一歳日頃鍛へたる手なみを見すべき時は來れりとその手下をひきいて深く敵地に侵入し、其功を奏せし

かば大に知事（殖民地の長官にして英國人なり）の爲に知られ、いよ〳〵用ひもよくなり行きしに失戀の餘恨僅かに癒されて、胸の細霧大に冴へ渡りたるの思ひをなせり、誠に其手なみの程は實に立派にして、一土人を集めて編制せる佛蘭西方の隊は充分に伏し盡され全く其野心を捨てヽ去れり、此機失ふべからずと英國政府は勇猛なる武官其名をブラッドックといへる人を派遣して、ワシントンと共に力を併せ更に他の方面に於ても亦其覬覦の念をたヽしめんとせり、然るに此時に於て英國の政府は其本國より派遣せし人々と米國にて採用せし人との間に待遇の差をなさんとするの兆ありしかば、ワシントンはそを甚はだ心よからざる事に思ひ、他にかこつけて軍職を辭し、去りて家に歸らんとすを見てブラッドックは大いに驚き、かヽる有事の時、有爲ワシントンの如き人の去ることあればそれこそは誠にゆヽしき事なりとて、百方手を盡して彼れを止め、リュウテナンコトロックスの位に任じ、副長として用ひたり、誠や士は己れを知る者の爲に死すとは人情の常古今東西ともに變る所なし、流石のワシントンも大いに此優待を以て懐しき事に思ひ、かたく意を決して其職に伏せり、兩人一となりて向ひなば如何なる敵をも破り盡すべしぞと思ひなして、群下いづれもいさみ立じに、悲しきかなこのブラッドックといへる猛將ワシントンを引き止むる程の明ありながら流石は自信倣岸なる英國人の常としてワシントンの忠告を用ゐず、軍略其宜しきを得ざりしために、大いに敗れ遂に敵手に倒れたり、敗報其本國に達せしかば英國政府非常に其意を悩まし軍機軍略一にワシンドンに屬托せしかばワシントンは敗餘の師を集めて是を指揮し總大將として敵地に向へり、勇猛ブラッドックさへあへなく戰死せし敵にむかひワシントンは如何なる伎倆を顯はすぞと上下萬人みな是をのみ眺め居たり、然るにワシントンの軍

畧はいつれも〳〵其宜しきに叶ひ、大いに敵に打勝つてジョルジ二世の旗を高く敵地の朝風に翻がへせしこそ、誠に此上もなき大功名にして實にブラッドック戰死の靈を慰するに足り、又大いに英國の名を重からしめたり。

此目覺しき事によりてワシントンの名は殖民地の凡てに聽へ渡り、所謂兒童走卒もそを知らざるはなきまでに八方到る處々に傳へられたり、されば其通行の地は、何れの處も皆思々の手を盡してワシントンを歡迎せざるものはなし、然して其パマンキーといへる地に來りし時其地の紳士チャンバーレーンといへる人の催しにかゝる歡迎の夜會に臨みしに計らずも爰に於てカスチスの寡婦に逢ひ、兩々相思の意通じて遂ひに一千七百五十九年一月十二日ある寺院にて結婚の式は擧げられたり（此事やゝ佛蘭西のナポレオンとジヨセフヒンとの婚に似たり）

茲に於てカスチス未亡人は再度鏡面を拭ふてワシントン夫人とはなりぬ、然して此夫人此偉人の身に如何なる内助の効を與へしそは次號にて語るべし。

炮 烙 贊

（横 井 也 有）

一生をつくろひなくその日くらしに覺へたる炮烙といふものは圍爐裏のもとにいやしまるれどもその德を論すればいとたうとし鍋釜は眷族も多くわかれて藥鍋など號するは銀に毛彫の繪樣にほこり數奇の茶釜は天明芦屋の作にたうとまれ探幽が下繪にあたいを高ふれば壹所の太郎二郎もおのづから氏族の榮に心おごりするなるべし、炮烙は一類もなく世にかゝつらふほだしもゝたず盧仝が夜なべに茶をほうじて雨夜のさびに伴ひ炙羅の豆のから〳〵となる時は、隣のやもめの耳を悅ばすいでや是を商なふ商人は程朱の說をきかされとも常に身をつゝしみて細道假橋を大足にはこばす市中に毀をくゝれともふかくいさかひをたしなめば馬士舩頭の氣隨には似さらんなげくべきは本間の狂言に鞨鼓と威勢をあらそひ又は歐陽公が工夫とり餅といふものを尻にわられて繩をとる道具となれるはおのが心にもあらでにげなきわざながらかのあし鼎の辟狂人の叒をかゝ

し石川五右衛門が釜いりより論すれば罪は至つて輕かるべしま
かるに和田殿の大磯がよひに頭巾の名に物すかれてより今に老
人の寵愛にあひて常にきんがあたまにいたゝかるればかれは藥
罐の下に立んこさかたくなんありける

ほうろくや棚から下りる秋の暮

文藝

六代君　上

其村子

妄執の雲霧に蔽はれては、眞如の神眼遂に其光をうしなひ、無慘やな、戀しき人を我とわが刄のさびとなしにける其時より、煩惱のきづなと共に緣なす黑髮をきり拂ひ、身は墨染の斗擻行脚、樹下石上に月日を送り、東西に馳せ又南北に徜徉ひて、偏に諸善奉行の素願、うたゝ人世に諸相にはまたと心をとゞめざりしも、日に增し募る平家大相國の暴逆、上御一人より下萬民に至るまで、ひとしく唱ふ斯日いつかほろびんの悲嘆、見るにたへず聞くに忍びず、衆生濟度拔苦與樂は佛の誓、何か苦しかるべきと、其頃蛭か小島に空しくも配所の月をながめ、一門の落寞を永へに悲憤せる前の右兵衛佐源頼朝にめぐり逢ひて、決起一番一には君の叡慮を安め奉まつり、又ひとつには家名を古にかへすべきことを勸めしに、此人忝しくも頓にうけがひ、たえて久しき白旗を石橋の山頭に飜がへし、一勝一敗さま〴〵の難苦を重ねたる後は、遂に平家の一門をこと〴〵く西海の浪に沈め、其身は征夷大將軍の高き位に昇り、天下皆萬歲を東風に和したりける。

信賞必罰は、名將の下をひきうる所以、我にも其酬を參らせんとありしも、もとより緇衣の身にしあれば官加階なにかせん、授領亦望むところにあらず、唯々あほき願くは、高雄山神護寺の再興、是が爲には思はざる逆鱗を蒙むりしまでの宿願、なにとぞ一宇建立せし

め玉へ、されば永劫の繁栄を彼所に祈り晝夜のまもりとなるべしと述たりければ、寄附一の滞こふるところもなく、さしもに險しき深山の木蔭、ひるなほ暗き幽溪に莊嚴赫灼の堂宇日ならずして成就なしけり。

扨も其後は獨りかの山に籠り、松風蘿月を侶となし渴



しては谷の清水をむさぼり、餓へては峯の木の實をひらふ、まことに首陽山のふることとも、我が身の上に知られたり、本尊は大聖不動明王、二六時中絶ゆることとなき護摩の煙は一陣の黒雲を張らせる其うちより、鏘々とひゞく神鈴の音をたよりに、迂餘曲折の九十九折、けはしき山路をもの丶數ともせず、茨岩角に足を破り、紅の血潮にすそを染なし、呼吸もたへ／＼馳せ來る二八妙齡の美女、やがて護摩壇のうしろにひれふし、御坊々々としきなみに呼べども此方は讀經三昧、耳にもいれぬ有樣なり、やゝ暫して護摩の煙は四方の梢に散りうせ、神鈴は響を松の風に讓り、法師はやおら壇より下りぬ。

ふりかへり見ればこはいかに、世に隔たりし此幽境、人の來るさへもいと不思議なるに況んやこれはかよわき女、ゆめ／＼人間にあらざるべしと思ふも更に驚く色なく、日月の如き兩眼をハツタと見開き、山も動かんばかりなる聲はり上げ、其處に來れるものは誰ぞ、山に久しき古狸妖怪、さては魔界の姿を顯じ、我法力を

さまたげんために來れるなるべし、されど何程の事かあるべき、古狸妖怪にもあれ魔界にもあれ、大明王の加護淺からぬ此文覺、いかで汝等ごときにやぶらるべき、久しく試みざりける北面の武士遠藤武者がこの金拳、汝が頭上に加ふべし、とく去らざやと、木魂に響くいかりの大喝、女はいよ〳〵ひれふして、恐る〳〵いひける樣、古狸妖怪にも候らはず、又は魔界にても候はず、妾こそは三位中將の北の方に仕がへまふすはした女なり、身にも命にもかへがたき一生の大願、御坊ならでは餘にたのみまいらする人もなく、態々こゝに上りしなりと、一句半言のよどみもなく、述ぶるに文覺はいとゞ詞を和らげ、左にてありしかや左にてありしかや、三位中將とは維盛卿のことなるべし、其北の方につかへまつる其方、世を捨て果てし文覺に大願ありとはいぶかしゝ、何にてもあれ身に叶ふことなれば、大明王も照覽あれ、必ず〳〵得さすべし、心を志づめて一々かたれと、いひつゝ側なる圓座にこそは座したりけり、女はいよ〳〵うや〳〵しく、兩手をついて首を下げ、さても我君北の方、去る年中將殿に別れたまひにし其日よりは世のいぶせさに都の住居も相叶はず、此御山のふもとより、程遠からぬ嵯峨の奥、大覺寺に世を忍びたまひ、忘形見の六代君を夜叉御前、たとへば左右の御手のごとく、中將殿に仕ふるごとく、片時も御側を離したまはず、うきもつらきも唯々これに忘れたまひしを、世の人鬼の恐ろしや、此事訴人するものありて、昨日六波羅の武士其數凡そ三百人、隱家を十重廿重にとりかこみ、一手の大將とありて北條遠江守時政、鎌倉殿の嚴命によりて六代君御迎ひのためにまいりたり、いざ〳〵渡させたまへといふ、北の方をはじめ一座の人々とやせんかくせんと胸うちさわぎ、側を離れぬ家の子齋藤兄弟は、何處よりも落しまいらせんとあせりしも、もとより蟻の匍ひ出でんひま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もなく、あへなく君はひき行かれたまひたり、苟も平家のゆかりとあらんもの、無下におさなきは土に埋めや、大人びたるものは斬捨るとのうはさなり、されば北の方はいふもおろか日頃沿ひたてまつりし我々に至るまで、身もうかん許なるかなしさ、天に叫び地にふすとも若君を助け奉るべき詮もなし、さるに或人のまふせしに御坊こそ鎌倉殿のこよなくもめで玉ふ御身なり、御坊の曰ふことゝしいへば如何なることにても用ひたまはぬことあるべからず、若君たすけたく思ひなば御坊に願ふの外なしと、きくがまに〳〵御山に上り來りしなり、此處に御坊にあひ奉つれば若君の恙なくかへり玉ひし思あり、願ふは御坊の御力命助け玉はれと且なき且くどきけるを聞終りて文覺は打うなづき、汝がいふこと一々に聞得たり、ゆめ〳〵心を惱ますな、是よりいそぎ彼役所にはせゆき、其北條にめぐり逢ふて必ず助け得さすべしと語りつゝ傍へなる戒刀とりてたばさみ、あとをも見ずに一目散、六波羅さして急ぎけり。

根を伐りて葉をたやすは、やがて後の患をふせぐの秘義なり、さればこそ趙氏ほろんでは二客孤兒をいだいて山林にかくる、實にまことさるべき事なり。

賴朝は心ゆくまでに平家を亡ぼし、上は主君の心を安んじ奉まつり、下は一家の仇をむくひ、身は二位將軍の高きにのぼり、鎌倉山にうごきなき源家の基をかため、思ひ殘るところなきにつけても、いよ〳〵氣にかゝるは、怨敵一門の餘孽、是がために後來東風のきそはざる日も或はあるべしと、いまだ枕もいと安からず、內意を外戚北條遠江守時政にいひふくめ、凡そ平族のゆかりとして男たらんものは幼少老大の差別なく、笹の根さわけて探し求めゆめ〳〵用捨あるべからずと、都六波羅にこそはたゝしめたり。

げに浮草のうね〳〵と、波のまに〳〵東岸西岸さらに

其處を定めず、時につれ世に從がひ、すべて威權の下につくこそ世の人の習ひなり、昨日までは一門の榮華、禁裏仙洞にもいや益し、堂上堂下に各々華奢風流を相競ひ、平族にあらざるものは人にして人にあらずと、大納言殿の大言はやがて其時の人心なり、名もなき靑侍も攝家關白の前を恐れず、縉紳かへつて媚を門下に呈す、たとへば富岳の裂けなん世なりとも、滄溟あせなん時なりとも、如何にして此一門の動きなん日のあるべきと、萬人目をそばだてしに思ひきや、今日は烏帽子の折樣まで、世に忘られし源氏風姿、だみたる關東の音をゆかしくおぼへ、高き卑き押なべて、偏に鎌倉の感賞に預かり家を起し身をたてんと、北條の指圖にまかせ、乃祖乃父は是が爲に口を糊せし平家諸卿の公達こゝにありかしこにありと、六波羅に密告するあり、或は生捕てすゝむるあり、日もまた淺きに今は早大方にかりつくして皆なきものとなしたるも、嫡流の公達小松中將の一見六代君ばかり、今において其在家定かならず、餘の千人より萬人より此一人こそ却て大事なるべきを、こは抑いかになしつるやらんと、時政は更に心も心ならず、今日と暮し明日と送り、すでに定めの日限も殘り少なくなりしかば、一先鎌倉に下向せんと要意なせし其日の夕暮、或賤の女の訴人により、嬉しくも大覺寺より向まいらせ今は萬望成就せり、いで〳〵今宵の内に御首うつて、明日はいよ〳〵發足との取沙汰、上下いと〳〵時めける六波羅の門前、邏卒の耳をつんざく聲高く、遠州殿に取次たのむと呼ぶものあり。

唯見れば見上るばかりの大法師、墨染の衣のすそを高くかゝげ聖柄の戒刀前下りにおび、今しもぬぎし檜笠を弓手に携へて立たる有樣、さながらに巖のあらはれ出たるが如し、數多き番卒のいつれもは、各々膽をつぶしていらへもなし、此方はいよ〳〵いらだちて、案

内々と鳴りさけぶ、其内の一人やう〱にして進み出で、御坊には誰にておはし候にや、當時御威勢他にならぶものもなき鎌倉殿の御外戚と皆までいはさずハッタと睨まへ、



無駄言は更に用なし、唯々案内致すべし、高雄の文覺といへば遠州殿には疾くよりの知音なりと、きゝ果てて並居たる番卒、いづれも其名を知らざるものなく扨は上人にておはせしかと、いとも恭しく案内せり。

正廳には北條遠州文覺上人、主客の座定まりて會見の辭正しく、上人は鎌倉殿の繁榮をきいて之を祝し、北條は上人の道心堅固の程をたゝへ、話はやがて六代君の上に及びぬ。

小松三位殿の公達六代君、昨日むかひ取られて候由、何處におはし候やと、上人のたづねによりて遠州は、さん候鎌倉殿の嚴命によりて、平家一門のゆかり、苟くも男たらむものは求め出してなきものにすべしとの御事、其爲の上京も昨日と暮し今日と送りすでに定めの日限も空しく過ぎなんとせしも、嫡流の公達六代君ばかり、御在家更に定かならず、鎌倉殿の御意も如何と、心も心ならざりしを、昨日漸くにしてたづね出し、懐しくもむかへ取り奉りて候が、早も御首打奉つり近

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日下向の筈に候と、聞畢て上人、さては未だ恙なくておはせし事のうれしさよ、如何にもして御命助けたさにこそかくは伺候いたせしなりと、思はざる外の詞に北條は殆んど打驚き、そは叶はざる事なるべし、餘の公達なればいざ知らず、大相國より正統の六代君、もし安穩にてましまさば、鎌倉殿の枕安かるべからず、されば詮なき御坊の御詞にこそと答ふるに、上人は兎も角も一目逢たく候が、苦しかるべきや、何條苦しき事の候べきと、北條のゆるしによりて文覺は六代君に見えたり。

身を忍ぶ荆棘の隠家も、遂に隼房に見あらはされ昨日爰に捕られてよりは、つや〳〵水だもまいらず、やす〳〵と一睡も眠り玉はず、狹き所に小さき圓座敷いていと殊勝に、流石は中將殿の胤とて表にはいと事もなげに見え玉へど、母君の事妹御前の事よりいとやさしかりし乳人はしたの事までも思ひ出されて不覺の涙とどめ得ず、いと思ひ入りたる有樣にて、唯うつむいてのみありしに、今しもゆくりなく上人の來玉ふ音に、態と面持をつくり、昨日かたみにとて母より玉ひし、小さき珠數を押かくし、上人の方をながめ玉へば、上人もいとゞ哀さのいやまして、やおら身近く進より、命生きたく思ほしたまはずやと問ふ、六代君はいとなつかしげに上人を見上げ、さん候一門の榮華つきはててかく今捕はれとなりし上は、假令へば俎上の肉命は疾よりなきものなりと觀じたり、されども母上の御歎の程もかなしく、かつは我さへもなくなりせば、父の君を始め西海に沈みし一門の佛果菩提、誰か訪ふもののあるべき、されば願ふは惜からぬ命を長らへ、上人の弟子となりて、内には俗緣の母君が心を安め、外には一門のなきあとを訪らひたくこそは思ふとぞ答ふ、御心安くこそ思し召せ身にかへても一命御助まいらすべし、ゆめな氣づかひ玉ひそと、流石傲膽不敵の文覺、

人を人とも思はざる荒法師も兩眼の涙を拭ふて元の座にかへり、今若君を見奉つれば、いかなるゑにしやありけん、身も浮かんはかり御痛わしく覺へて候、願ふは二十日の日數をまちたまへ、急ぎ關東に下向して鎌倉殿に逢ひ奉つり叶はざるまでも願ひ見んと餘の人ならぬ上人の餘儀なき詞に、北條も否まんすべなく、やがてそをうけひきければ、此由を若君につき奉つりし齋藤兄弟に言含めて嵯峨にかへし、我身は其儘逢阪の關路をこえて、鳥がなく東へこそは出立せり。

根なし草

桐廼舍

いづこにやありけんわび住居する翁ありけり、此翁いたく夜をこのめる性質にて、晝のほどは魂なき人の如くなれど、夜は更行くにつれて心澄わたり、鳥けものはいふもさらなり草木の私語も聞わくほどなるに、ある夜ふと風鈴の音の耳にいれるはいとも涼しき聲音にてやよなうランプの君よ妾は宿世いかなる罪ありてか、この堪がたき暑さにも軒端につられ、暫時だも風なき折は詈られ、人は納涼よ浴湯よと寛ぐほどに、夕風のそよげばいともいそしくて身さへ砕けんばかりなるを、あはれと見なむ人もなく、やゝ夜更てはつれなくも雨戸の外にしめ出され、淋しき夜半を泣あかす我身の上に引かへて、君は終日休らひてゆふべになれば持囃され、いかなる貴き客人の御前に出ても憚からず、またためづらなる新聞を夜ごと〳〵に見給ふは、如何に樂しくおはすらむ、實にうらやましく侍るかしと、託歎くを打消して、ランプは光る眼を見張り「サナのたまひぞ風鈴女、御身は甚く歎息るれど、只夏のみの勤ならずや、我は四季とも差別なく、逆侍はれて此のごろの、堪ぬ暑さに油汗、絞るゆふべも吹風に、あふ事ならぬを忍び々て明行は、あるに甲斐なき棚の番、鼠の

葉を數とりにうきをかぞへて居るものをと、消えいる如きくりごとを、かたへ聞せし柱時計、りんと一聲打いで、「あな無益なるくりごとかなさはいへ風鈴女はをみな氣に、さ思はるゝはことはりなれど御身は雄々しき大丈夫ならずや御身等互に羨つまた人間を怨めども人間社會の世渡は苦しき海ともいふなれば、いかで我等のはかり知るべき、我等はおのが身にかなふ、勤を怠ることなくば、世に捨てらるゝ事もなく、實にうらやすの皇國ぞと、直なる針の一筋に、思ひめぐらし勤むるより、今は貴賤の隔なく、家に欠れぬ一具ぞと、愛で慈かるゝ身となりて、樂しき時に逢にきと、いさめ勵ます言の葉に、翁も思はずあと感じて、時計よいしくもいひたりと、口辷らして見かへれば、時計はただにきしるのみ、ランプはあかく軒端なる、風鈴の音はさえまさりて東雲近く成行けば、翁は例のもぬけの殻、聞たる事も知るや知らずや

◎金魚新子　本年金魚新子の出來模樣を聞くに親魚は毎年四月二十日頃より八十八夜前後に掛けて子を產落す例なるに本年は四月七八日頃の氣候俄然暖氣を催ほしたるより諸魚共に例年よりは凡そ十日間も早く卵を產みたるに其後の氣候頗る不順にして或時は水中に手を浸せば忽ちにして冷却するが如き寒冷の氣候ありたるより卵の孵化前後に於て腐敗又は斃死したるもの甚だ多く隨て出來榮ゑ非常に惡しく金鱗の新子毎年六月一日一尾普通物にて八錢位が例なるに本年は一尾十錢位にして品物頗る拂底なるより隨て去年子即ち二才以上の親魚も概して二三割位は騰貴したりと云ふ扨て新子は今後一箇月許りが最も飼養に困難の季節にして入梅中には斃死するもの多きことなれば此際特に注意すべきことなり

談叢

大邱噴飯錄（鷄林の風俗一斑）

松原乾坤

戎征の始めに方りて予朝鮮內地を歷遊す、特に慶尙道大邱府に在ること若干週日、附近の風俗土情に就て拾遺するもの少からず今記して其二三を揭げん

大邱府内の旅人宿

大邱府といへるは朝鮮慶尙道内の首府にて其の戸數は一萬四五千もあるべく、是を我國の都會に例せば名古屋か仙臺か廣島にあらざれば熊本、まづ其地位を均ふすべき大都會なり。さりながら此の大都會なるもの丶躰裁如何と見るに、第一驚くべきは、市中に草屋多くして瓦家の少きことなり、而かも其草屋といふも日本の田舍流義に躰裁よく剪采したるものならずして、只天然の藁を其儘に被せたるのみ、一望滿街堀立小屋の觀にて廢堞頽壁の壘々たるを見るのみ、而かも是れ貧邦亡國の象といへば敢て怪しむべきにもあらねど唯其市中の不潔汚穢なるに至ッては域外人の堪忍し難きものあり。第一街道狹くして巷は縱横に曲り屈り、坎坷凹凸殆んど歩むべからざるに加へて人糞人尿の街上に溢れ散ずるものあり。掃溜は市中の各所に堆を爲して一群の醜獸の鼻息を立て丶ブー々々と唸りつ其臭物を穿ち、玉虫色に光りたる蒼蠅に其身を襲はれ、皮毛剝脫して見るさい穢らはしき犬は惶々としてさながら探偵が物を見るが如く左右の臭氣を嗅いて人糞を穿ち啖ひ、豚ありて又其犬の尻を嗅きつ丶走る樣如何に見苦しき光景なるよ。人糞、塵芥、犬、豚はこの市街を飾る一種の修飾物なるが扨て其家屋を見るに、府使の政廳、邱府の衛門若しくは兵營、二三の官紳の邸宅を除くの外は何れも大抵豚小屋同樣の陋屋にして室内の不潔なること言語に盡せず、まづ其壁といへるは皆手づくねの荒壁にして觸る丶時は衣服を汚し、屋根裏は鍛冶屋の鞴場のごとく、一面に泥を塗りて天井極めて低く、欠伸する時手の先屋根裏を衝とは串戲にあらず、部屋の廣さも我が邦の五六疊敷普通の家の行燈部屋位に過ぎずして其構造を長方形に造り、出入の戸口は僅音開きとなして如何なる人も毬のやうに身を縮めざれば出這入りすること叶はざるを以て其一斑を知るべく

殊更常住の座客は談次屢〻痰を吐き、鼻涕を啜るに吐きたる痰は座せる蓆を揚げて座の下へ埋り、啜れる鼻涕は手の掌にこすりて直ちに壁に塗り付く、一般の情態この如く推して以て其不淨汚穢なるを知るべし



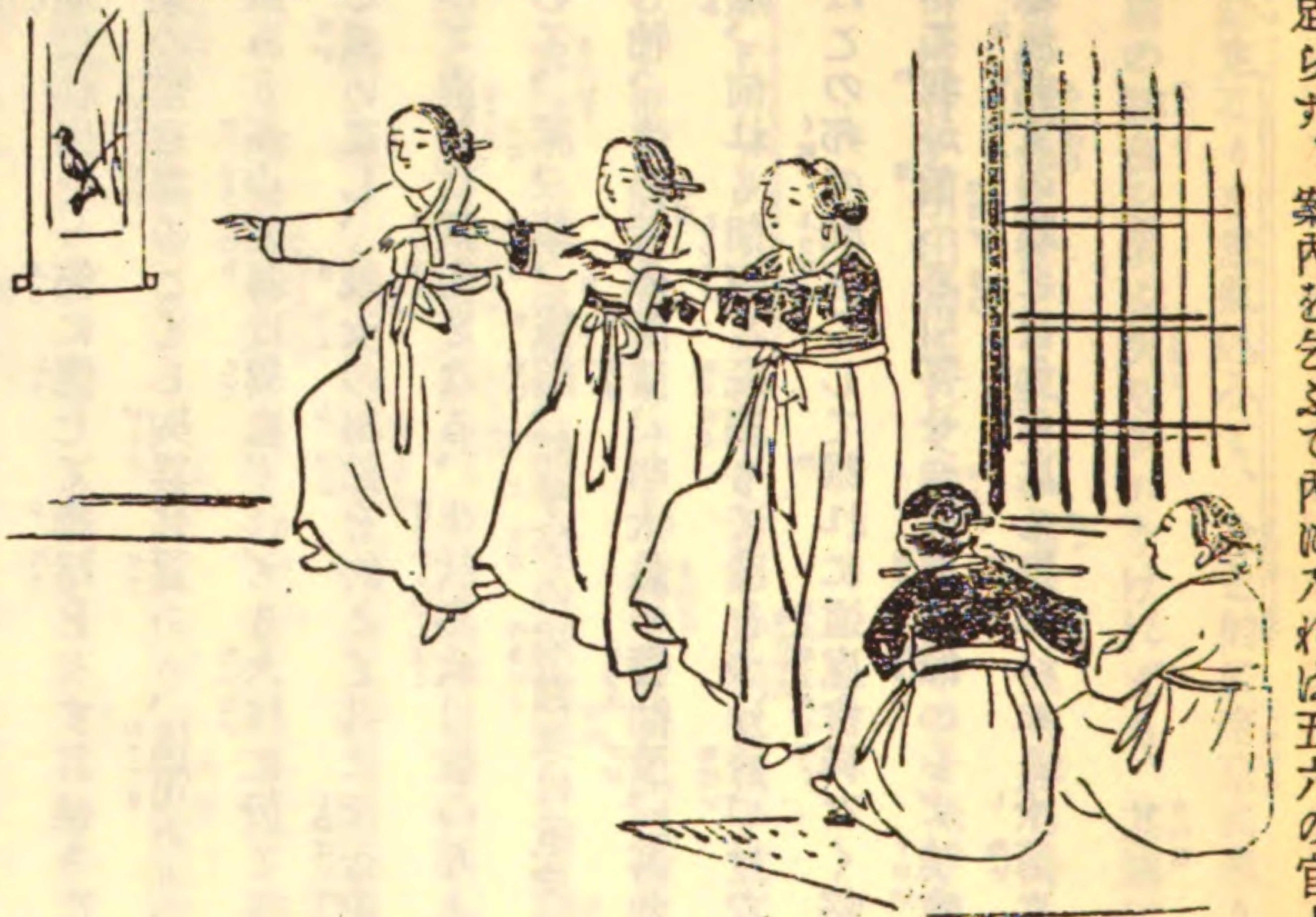
足いまだ彼の邦の土を踏まざるの人にあッては兎角想像を高尚にして往々實際の景象を誤まるもの多し、大邱は一道の大都城、戸數殷庶、物貨輳輻、山間交通の要衝に方るを以て割烹店旅籠屋の如きも必らず夥しからんと想像するは無理ならず然れども是れ唯名のみ、實際に於ては料理店旅舍たるもの殆んどあるとなし、蓋し其料理屋なるものは彼の地に酒幕と稱して其躰裁殆んど我が邦の縄暖簾に彷彿し、まづ其豚小屋的廢屋の門の柱に「莫恪床頭沽酒錢」「一杯傾盡遊仙郷」などの文字は如何にも仔細らしけれど床頭に鼎出せる大鍋の中を見れば牛の髑髏の煮込一見凄まじく腥臭を放ち、尿壺の如き器物の中に何かと見れば粥の如き濁酒を盛られて蕃椒を撒りかけたる鱠の鉢と共に椽頭に並べ出され、椅子もなく卓子もなく、叉一脚の凳子さいもあらざる所に馬夫、輿丁、七八人の擔夫、寄ッて團ッて一室に蹲踞つゝ酒を飲み、肉を啖ひ、明太魚の干物を

指頭にて撈りつゝ食ふ様は更らなり甌中の醤液、皿中の鹽菜、凡そ食ふ物としての不潔なるは此の邦の特色にして、腐れたる魚菜を調理するは申までもなく、まづ其調理法の亂暴なる一端をいへば手鼻をかみたる手を以て直ちに味噌甌をかき廻し、糞尿をいぢりたる手を洗はずして直ちに煮物の鹽梅を試るなど如何なる豪傑といへども箸を上ぐるに躊躇せざるを得ず、而して其旅舍の不躰裁なる事我邦の木賃宿を下る數等乃至數十等にして室内極めて隘苦るしく、其上暗くして且つ臭く、時としては球味噌を天井につるし置く爲め其臭氣放發して奇臭鼻を衝き、加ふるに彼の邦人の煙草好なる旅舍の室内は苛烈なる惡草の烟を以て充盈し外より入るものは忽ち頭痛を感ずるに内にあるものは一向平氣の顔色にて疊もなく敷物もあらざる藁の上に踞座して假睡し横臥して熟眠し、眠るもの雜談するもの、屁を放つもの、齒切りするもの方三間ばかりの一室内に數十人算を亂して宿泊す、誠や邦人の鷄林内地を旅行せしもの其家を稱して皆な蜂窩燕巣といふ、實に然り

府使の饗應

府使は一地方の長官にして我國の縣知事位に當るものか、其財力の貧富、實力の大小は兎も角まづ其威權の赫々たる、小民に對して飽くまで暴威を振ふの熾なるは我邦の地方長官も三舍を避くるほどの勢にて其邸宅は廢頽したれども威かめしき門あり、「大邱都護衙門」と書したる扁額を掲げて左右に怪しげなる龍、麒麟の類を丹碧もて彩り、剝落せる胡粉の上を紅がらもて塗りたる柱を俛りて門を入れば正面に破風づくりの政廳あり政廳の傍らに一とつゞきの官宅らしきものあり、府使の邸は則ち是れなり、一日客あり招かれて其饗應に與かる邸は僅かに瓦造りなれども平長屋にして大名の勤番部屋の如く入口は一間半ばかりにして奥行

四五間に足らず、案内を乞ふて内に入れば五六の官人



床上に胡座して長煙管を咥へつゝ雜談頻りなり、僮僕出でゝ客室に誘ふ敷くに薄縁五六枚あり中央に長方形の粗卓を据へ木製の椅子二脚本邦ならば田舍の貧乏なる小學校にあるやうなる器物の供へ付誠に貧乏質素といはんか簡單至極のものなりき、挨拶終りて待つ間程なく出で來る三四の官人は、何れも白衣長袖の縉紳風にて馬鬣製の帽を戴けり是れ後にて聞けば賓客なりしと雜談數次やがて時刻となり主客各々よき程に陣を取りて控ゆれば中央の椅子長卓は撤せられて客室は直ちに食堂となる、二三の使丁方一尺ばかりの猫脚の膳を捧げ來りて踞せる賓客の面前へ置く、膳羞の獻立如何と見れば大なる眞鍮製の飯器に小豆飯を盛りて、是を膳の左方に置き中位なる眞鍮の平碗に鯉の味噌汁を供して右方に置き川魚の鱠、豚の燒肉、其他二三の魚類菜類を小形なる碗に盛りて向ふづけとなし洋白製の食匙に太き竹箸を添へて供しぬ、膳の高さは踞して座するに乳部以上にありて宛がら小兒の机に向ひたるが如し、食前に酒あり又萬種の肴あり一瓶傾け盡くす頃三四の妓女手に各ゝ一個の樂器を提さへて障間より顯はれ來るあり始めは

俚歌を謡ひ、稍々聲調のとゝのふに至るや座右の樂器を拿りあげて手に々々合奏をなす此の時一群の妓女又障間より顯はれ出で、節に應じて舞踏をなす其樣さながら太神樂の幣束舞のごとし樂器に簫あり、横笛あり、琴あり太鼓あり多少其器は異にすれども大躰に於て本邦のものと差いなし、妓女の舞踏を終ると共に酒盃獻酬の事歇みて直ちに喫飯となる、牛飲馬食は彼の邦人の特色にして、豚、羊、家鶏、雉子等の燒肉又は煮肉、發芽の漬し物、牛の舌の酢漬、明太魚の醤油漬、其他の野菜肉類、何れも胡椒と蒜頭もて味をつけ香づけたる割烹品はこの邦の風俗として誰れに遠慮會釋なく銘銘腕を伸べて我が前へと引寄せつゝ周圍憚からず喰意地張ること他邦人の眼には如何にも驚かれぬる次第なりけり。

命賭け（中）

楓葉

宰相は堪へ兼ね、「陛下、最早殘る所は小臣の禿頭一つと相成り候、願ふは小臣此頭を賭けにして、陛下の御物となりし娘を賜はり候へかし」と云へば、ムラロドの君も頷き云ひて、君臣差向ひてまた一番の勝負ありけるに、偖も運の盡きにや、宰相見事に打負けぬ。帝は笑はせ玉ひ「コリヤ、卿が頭は今日より朕が有ぞ。併し卿が大膽に免じ、卿に代る可き者の出で來る迄、卿が頭は暫く卿に預け遣はす。」

大膽不敵の宰相已に苦もなく打負けゝれば、帝は廣く相手を求め玉ひけれども、一向應ずる者なかりければ此度は勝ては宰相に任ず負ければ首を打つと云ふ世にも珍らしき條件にて、國中殘る隈なく御相手を仕る可き者を募らせらる。誠や人間は欲の動物、自惚の動物

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なれば、吾手際ならば見事帝に打勝つて宰相の位を博せむこと必定なりと意氣込みて、命を的に帝京に來りて帝と一席の勝負を爭ふ男も多かりけれども、其場に臨んでは帝の威光にけをされてか唯の一人も勝ち得る者なく、可惜首を引出物にして骸のみ宮中をすべり出でぬ。

斯る所にアドリアノーブルと申す市の片隅に親子三人暮しに詫しく世を渡る者ありけり。其子と云ふは當年二十三歳、容貌と云ひ氣品と云ひ才と云ひ珍らしき青年にて、殊に將棊は生來の好物、五つ六つより打ち初めて、二十歳を超ふる頃には近邊に刄向ふ者もなかりけるが、此たび帝の此勅諭を聞きて、吾れこそ罷り出で丶見事宰相の位に上らばやと思ひければ、父母の泣きすがるを宥めすかして、君士丹丁堡へと辿り着き、宮中に伺候して夫れと申出ける。

相手欲しき帝、早速其者此れへと召寄せ玉ひ、つく〴〵御覽ありけるに、白玉の額丹花の唇女にして見まほしき美少年なりければ、可惜花を散らすも憫然なりと心を動かし玉ひ「コリヤ〳〵、其方は朕が勅諭の廉々をよく存じ居るか。」

「左樣にムります。若し負けますれば、たしか命を召さる丶とやら。」

「さて勝つたら、さしづめ宰相じや。其方は命賭でも朕と勝負をしたいのであるか。」

「其爲めわざ〳〵參りましてムります。」

「不憫な奴ぢや。が、其樣思ひ込んで居れば、ドレ相手をして遣はすぞ。」

此少年、名をばオスマンと呼ばれける。

斯くて帝は近臣に命じて山海の珍味取り揃へたる饗饌を召させ玉ひ、オスマンにも相伴を命じ玉ひ、已に終れば日盛りの一睡悠々と夢み玉ひて、起き嗽ぎ下哺の風立ち初むるマルモラの海一ト眼に見下ろす奥の御殿

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の窓押しひらきて、瑪瑙の將棊盤に寶石の駒取り揃へたるを間に置き、少年相手にいざ一ト勝負と御髯片手に悠然と打ち始め玉へば、群臣侍從恭しく左右に伺候して勝負如何と伺ひ居る。

彼此駒五つたび動くよと見る間に、オスマン「勝負つきましてムります」と云ふに、帝を始め皆々盤の面を見つむるに、果してオスマンの勝ちなりければ、帝は舌を吐きて默し玉ふこと半晌ばかり。やゝありて帝は勃然聲を高め「やをれ、小猴子、奇怪千萬、如何なる魔神の助あれば、其方はたつた五ッ手の其内に見事朕を負かし居つたるぞ」。

「陛下、誠に此は偶然とも何とも申條なき仕合にて、努努小臣の勝には候はず。」

やゝあつて帝は少しく顏色を和らげ玉ひ、「兎に角其方勝つたれば、朕は決して言を食まぬぞ。それ臣下ども、宰相の衣裳これへ持て。」

錦繡燦爛たる宰相の服は、青年の身を纒ひぬ。皇帝は群臣百僚を召して新任宰相を引き合はせ玉へば、昨日まで名もなかりつる微寒の一少年忽ち土耳其大帝國の大宰相となりける。此の仕合せを羨む者は限りなく羨みけれども、宰相罷り出づる時皇帝之を呼び寄せ玉ひて「明日また一ト勝負するぞ」と宣ひつる御言を漏れ聞きたる者は、あなあはれ、今日宰相となりて明日は一敗首を召さるゝにやあらむと云はぬ者はなかりけり。

鮟鱇の話

省亭こが

鮟鱇の母は常に其子に敎へて曰く

『鮟鱇の餌待ちと云つて他の魚達より擯斥されることの無念心外口惜しい、それは、なるほど、鮟鱇と云ふ魚は一躰に馬鹿氣て居るであろう、流れに向つて

大口開いて餌の流れ込むを待つて居るなど、まことに笑ふべき状である、大きな眼球、大きな口、其無恰好なる躰、われは此鮟鱇と生れしが恨めしい、けれど、われは心まで鮟鱇とはならぬ考へである、他の鮟鱇達のやうに、餌待ちの譏は受けない考へである、否、速かない考へである、則ち之を行はない考へである、力の及ぶ限りは、自活の道を求めて勵み、夫を扶けて家政を整へ、其子女を教育しようと思つて居る、であるから、われの子供は他の自墮落なる鮟鱇とは交ることを許さない、人は皆汚れたる中に、われ唯清き心を以て立つ所存である、試に見たまへよ、境界こそ



違へど鯉も均しく魚であるが、其鯉は如何に人間様に賞美されるかを、龍門の鯉、爼上の鯉、皆これ武士の手本であるとて、花菖蒲と丶もに五月の花や幟にまで畫かれる、まことに譽あることである、それは何故であるかとなれば、鯉は其心の清きこと三伏の炎天に氷を嚙むが如く清しくて、一たび爼にのぼれば、鱗一枚動かさず、其覺悟の健氣なる、死を知つて敢へて見苦しく驚かず、其氣象の凜たるからである、これ素より其鯉の天性であるとは言ふものの、又之を育るもの丶力も與つて大なるものであると思はれる、又、鯛も人に賞美される、これも其行ひ奥床しく、其味の清冽しくて、其姿の美しいこと、自分などの及ばない所である、鯨と云ふ魚は、馬鹿に大きくて、折々は海底電線の妨害を爲し、或は小舟を覆し人を喰ふ、故に人間は之を憎む、されば、熟々思ふに、柔順にして或時は心剛に、よろづ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

清き行ひあるならば、其姿の美醜善惡に關せず、心あるものは之を敬ふであろう、であるから、われは、常に子供が餌待ちの鮟鱇と交ることを禁じて居るのである、

斯の如く、鮟鱇の母は確乎たる理想を以て子供を教ゆるものから、其子供は皆母の德に化せられて、鮟鱇の中でも群鷄中一鶴の觀がある、

或時、汐のまに／＼遊んでトある岩かげに行つた、其所には、大きな鮟鱇が餌待ちをして居た、

『オイ／＼、其所を通るは鮟鱇の君ではないか』と呼びかけた、

『おう、君は何をして居るのだ』と教育ある鮟鱇は言つた、

『餌待ちをして居るだ、此所は餌が澤山流れてくるよ、なんでも馬鹿な漁夫が餌を落すと見えるヮ』と言ふ、

『僕はもう澤山、君こゝでやりたまゑ』と侑める、

『僕は左樣な見苦しいことはせん』と苦りきつて居る、

なにが見苦しい』と無教育の鮟鱇はせき込んで言へば『鮟鱇の餌待ちと他の魚達に擯斥されるのを意氣地ないと君自分には思ふことが出來ぬか』と言ふ、

日頃より母が理想の教へを受けて居るだけあつて氣高き言葉、それが無教育の馬鹿な鮟鱇には分らない

『分らないな、なにを言ふんだ、笑ふとぶん擲ぐるぞ』

『だからお前は鮟鱇と云ふのだよ』『それは言はなくても、己の名は鮟鱇、お前も鮟鱇だ』『ナニ、僕は鮟鱇ではない、もう名を改めたよ、鮟鱇とはお前がことよ、馬鹿と云ふことよ、この鮟鱇』『なんだ、手前も鮟鱇と言ふぢやねえか』と言葉も段々ぞんざいになる、『あゝ小人は養ひがたし』と嘆息して教育ある鮟鱇はこゝを去つた、

＊　＊　＊　＊　＊

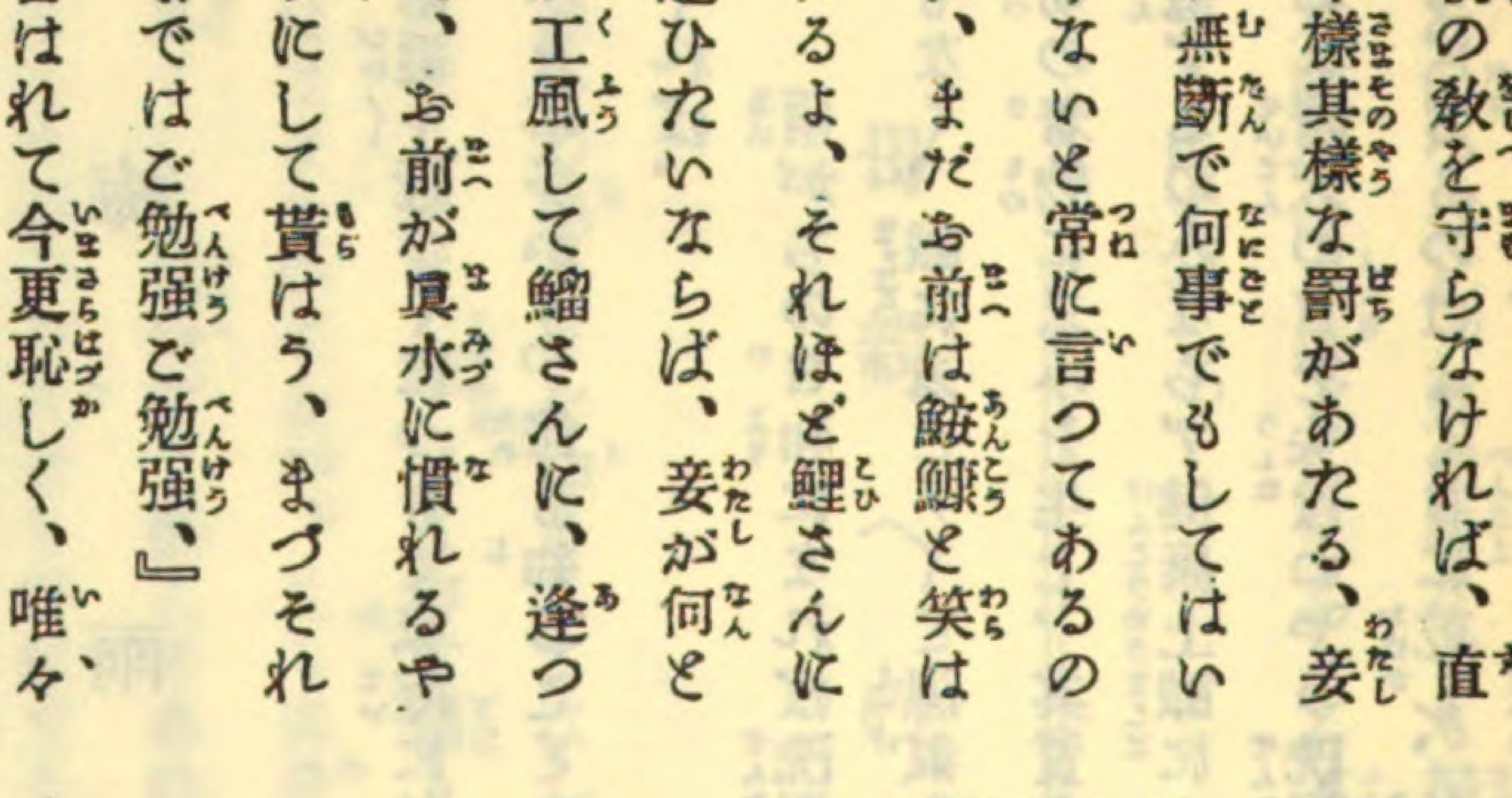
『僕は、ね、母ちやん、其勇ましい鯉さんに逢ひたくつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て逢ひたくつて、ね母ちやん、連て行つて下さいな』と言へば『母ちやん行けないもの、なぜつて、それはね、汐に住む魚は俄に眞水を呑むと苦しいからだよ、永代橋下へ行く鯔さんに逢つたら、頼んで連れて行つて慣して貰らつて進よう』

子供心のやるせなく、はやく鯉さんに逢つて見たい、そんなに佳魚であるか、と思ふものから、或日、品川沖より隅田川さしてぶら〳〵と來かゝつた、途中若し鯔にでも逢つたならば、眞水に住む方法を習ひ、床しき鯉さんに逢はんものと、屋形船の影を追ひつゝ、吾妻橋下まで來た、恰も滿潮の折なれば、さほどの苦痛もなかつたが、後には潮水全く引去りて、眞水となつたので、鮟鱇は俄かに胸苦しく、眼眩みて呼吸塞がらんとす、南無三寶と狼狽一方ならず、踠きつゝ辛くも汐水のほとりまで泳ぎ下つた、けれども身躰非常に疲勞して、母の許へ歸る力もなくなつた、

やうやくにして家に歸れば、其樣子の尋常ならぬに、母は怪みて其故を問ふた、包みかねて其實を語れば、『親の敎を守らなければ、直ぐ樣其樣な罸があたる、妾に無斷で何事でもしてはいけないと常に言つてあるのに、まだお前は鮟鱇と笑はれるよ、それほど鯉さんに逢ひたいならば、妾が何とか工風して鯔さんに、逢つて、お前が眞水に慣れるやうにして貰はう、まづそれまではご勉强ご勉强』と言はれて今更恥しく、唯々諾々、恐入り奉るのみだ、



それより後、この鮟鱇は種々の苦勞を重ねて、望みの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

如く鯉に逢つて、其清き心を聞き、大に感ずる所があつたと申すことである、

省亭云ふ、此鮟鱇の母の如き理想の女があつて、其家庭の子女を敎育したならば、遊食の民も出來まい、法を破り、人を泣かせ、親を泣かせる悪人も出來まいものを、江湖の女子よ、閨房のお化粧のみに心傾けで、ちとこのへんの事を心がけたまへよ、ね、ね、

《をはり》

◎看病の心得　本書は曾て東京慈惠病院看護婦たりし平野鎹女夫の編纂になりしものにて學理と自家の經驗を記して頗る懇切を極む、看護婦たらんことを欲する人、若しくは家庭の子女必携の良書なり（發賣元日本橋區本町博文舘定價二拾錢）

家政

梅雨中

K.K.

梅雨追々近づくにつきて家庭に於てはいろ〳〵の注意すべき事多かり。誰も知ることなれど、其一つ二つを擧ぐれば、

衣　雨がちの日和になれば洗濯の出來ざるはいふまでもなく、誠にじと〳〵と濕氣を含み、かび易くて、大切の着物にしみを生じ、其質を損するなど實に不快を感ずるのみならず健康上誠によろしからざれば此頃の如き晴天の日を失はぬやう洗濯し得るものはなし、然らざるものはよく日に乾し、後悔なきやう豫め充分の用意を整へ置くべし。梅雨中はフランネル、紀州ネル等毛織物尤もよろしく、また梅雨中は下着シャツ

の類を多く用意し置きてよく取りかへることを怠るべからず。寝衣など尤も然り。

食　これは直接の病根となるものなれば、注意の上に注意を要するなり。殊に毎日〳〵じめ〳〵として壯健なる人さへ氣も心もめりいるやうなる頃は、食事も何となく進まぬものなれば、主婦たるものは消化よく滋養多き食品を撰ぶのみならず、調理法に深く心を用ゐて一家の團欒をたのしくすべきなり。此時節には自然運動も少なきものなれば、消化にはよく注意し、たまにはパンとか麥飯など用ゐるをよしとす。又子供のとりものなども餅菓子の如きものは餘り與ふべからず。少しの不注意よりチブス、赤痢、マラリヤ、脚氣、腸胃カタル等の疾病を引起すものなり。

住　部屋のすみ〳〵、臺所、流し等の清潔は不斷の事なれども、殊に梅雨の時節には丁寧にせざれば思はぬ結果を來すものなり。臺所の戸棚などは誠にかびやすきものにて食物をいるゝところなれば毎日ならば最もよしさもなければ一二日おきに熱湯をもて拭き常に清潔を保つべし。又便所なども掃除をよくして石炭酸、石灰或は臭氣どめをふりて不快を感ずるやうの事なきやうにすべし。

母親への注意

K. R.

「人其子の惡しきを知ることなし、其苗の大なるを知ることなし」と諺にも申す通り、子の愛程親の溺れ易きはなきものなるが、こゝに分けても親たるものゝ陷り易くして愼む可き事こそあれ。其は何ぞと云ふに、親たるもの吾子を見せものにすることなり。誰も吾子は可愛ゆきもの、人に誇りたきものなれども、其も過ぐれば親馬鹿の譏を招くはよけれども、子供の大害と

なるものなり。然れば子供の爲めに分限不相應の美衣美服を着せて、人の追從を喜び、或は昨夜内の兒が云云の俐巧なる言を云ひたり、今朝云々の珍らしき手柄を羞たりなど人に誉めそやし、來客の時など子供を呼びて其の妙言奇行を客の前に演じさせて、喝采を博して得々たるなど、親は樂み、客は慰み、子供は誇りて、誠に無邪氣なる事の様なれども、熟々思へばうたてき限りにぞある。斯く子供をそやし立つるの果ては、子供に自然の快活なる氣風を失ひて早やくも氣取ると云ふ事を覺へさせ、人となりて世に出で失敗して悟る迄は、天上天下唯我獨尊の心地をするに到る。それのみか、一たび失敗し悟りては、反動のあまり自から輕んじ失望するに到る。是も元を質せば、方外にそやし立てし者の罪なり。左れば十で神童十五で才子二十過ぐれば尋常の人など云ふも、畢竟此のそやし立てたる結果なるべし。無暗に子供をそやし立つるは、子供に高慢氣取を敎ふるものにて、子供に高慢を敎ふるは子供に失敗失望自棄卑屈を敎ふるものなれば、親、分けて母親は深く此點に注意すべきことなり。

梅の實

K. K.

梅實もはや盛りになりぬ。都にてはさもなけれど、地方にては生梅を食する者多きことなるが、鹽漬紫蘇漬にても餘りよろしからざるに、生梅を食するは誠に危險なるものなれば、堅くつゝしまざれば思はぬ事に至る事あり。近頃の事なるが、或處にて十二歳になる男兒十歳になれる妹と二人桑摘みに出て、歸り道、渴に堪へかね、梅の實をとりて打ち食ひ、其まゝ家にかへりしが其夜のこと遽に兄妹共に腹痛起り、次第に募り〳〵て苦しむ事一方ならず、醫を迎へ手を盡しゝも其

効なく終に二人共に命を失へりと云ふ。此は生梅の中に尤も胃を刺激する一種の酸あるが爲めなりとぞ。よく〳〵つゝしむ可き事なり。

三の資格

T. K.

或男の云ひけるは、余若し妻を娶らば、着物の下着を清らに美しくする女を娶るべしと。此は實に女の大切なる資格なり。

或男の云ひけるは、余若し妻を娶らば、物捜しせぬ女を娶るべしと。或時男あり、兼ねて心をかけ居たる少女の家を訪ひけるに、其少女たま〳〵縫物すとて、指環をさがし兼ね、家の內殘らず尋ねまはりければ、其男心に悟る所ありて終に其少女を娶らざりしとぞ。

或男の云ひけるは、余若し妻を娶らば、菜汁は濃く立て、芋汁は薄くたてる女を娶るべしと。天下の料理とても、畢竟此のたて加減なれば、まして家の總理大臣をや。

言は卑近なれど、三の資格、女のよく〳〵味ふ可きものにこそ。

家庭の談話

恕哉

家庭間の談話は、家庭の敎育上頗る勢力を有し、感化力を有するものなり、一家團欒として談笑快話するの際に當り、父母の膝下に纏々たるあどけなき黃口の稚兒は、何氣なく面白さうに其談話に耳を傾け意を注ぎ來りて、知らず識らずのうちに、垢なく痕なき白紙の如き玲晶なる腦裏に感染を與へ、刺擊を加へ、而して兒童は、未だ談話の善惡を判別取捨するの腦力なけれ

ば、其談話の良否如何に拘らず、一度びその感染を受け、刺擊を與へられたるものは、遂に頭上霜を戴くに至るまで、尙ほ腦裏を脫却すること能はざるに至るものあり、故を以て一生涯の言動の重なる部分は、この稚兒間に於ける家庭の感染刺擊によりて支配され、孟母は軻の賢を出だし、楠母は正行の忠を出したる所以、家庭の談話が兒童敎育上に大なる勢力を有する事は、瞭々として明かなり、家庭の談話、旣に兒童の一生涯に關係を及ぼす程の大勢力ありとせば、家庭の談話なるものは、最も父母たるもの丶注意を要すべきものなり。

追懷せば、去る二十七八年日清戰役の際到る處の新聞雜誌は日夕戰爭の報を齎らし來り、演劇、講談、亦た日清事件を演じ、各戶に於ける家庭の談話は、專ら我國民の義勇、愛國、正義、敵愾等の事項ならざるはなし、從つて父母に對して「チャン／＼は弱いねー」「日本人はエライねー」等の問ひは、屢々彼の無邪氣なる兒童が乳臭き口より、迴り遠き口調を以て、繰り返され、友達と遊びては、常にこの話を傳へ、親戚の叔父叔母に遇へば、話頭亦たこれに及ぶ、家庭の談話の兒童に感化を及ぼすとの速かなる、影の形に從ふが如く、又た水の方圓の器に隨ふて其容を改むるが如し。

家庭の談話が兒童に感染を與ふる事の勢力ある斯の如し、而して日々家庭に於ける重なる談話の材料は、槪ね新聞紙、雜誌の記事なりとす「今日の新聞には何にか珍らしい話があるかネ」「近頃とんと面白い事柄もない樣ですが今日の吉原の心中談は中々珍らしい話です」「昨日の新橋藝者の弗箱の競爭は愉快だつたねー」など丶、所謂小新聞の艶種なるものが、各戶に於ける家庭間の談話の重なる部分を占むるとせば、その家庭の裡に成長しつ丶ある、日々家庭の談話によりて多少の感染刺擊を受けつ丶ある、清淨無垢なる兒童の腦裏

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

には如何に反映し來るべき、「今日の新聞にはカケ落談は無いかねー聞かして頂戴な」と、遂には好奇心に富む兒童の、乳臭き口より問ひ懸くるに到り、父母たる者も、亦た好んで卑猥なる談話を爲すを憚らざるに至り、知らず識らず、德性の高下、事理の善惡を判別するの腦力を埋沒し去り、思想卑野に墜りて、爰に第二の天性を形ち作り、其極遂には善を善とせず、惡を惡と思はざるに至るべし、斯く觀じ來らば、家庭の談話なるものは、父母たる者の、勉めて最も愼重に愼重を加へざるべからざる事柄たるなり。

人既に第二の天性を作り、惡習慣に感染したらんには、改めんと欲するも容易のことにあらざるべし、而して其第二の天性を作るの時機は、家庭敎育に於て最も勢力を有すべし、而して又たその家庭敎育期に於て、最も感化力を有する所のものは、家庭の談話なりとす、故に予は兒童一生の言動を支配する重なる要素は、家庭の談話にありと極言せんと欲す。

父母として其兒を愛せざるはなかるべし、既に其兒を愛するとせば、必ず其兒の立身出世を望むや切なるべし、其兒の立身出世せんことを望まば、父母たるもの須らく家庭の談話に注意し、愼重を加へ、勉めて卑猥下劣の談話を避けざるべからず、而して又た家庭談話の重なる材料たるべき、新聞雜誌の種類を擇むことも注意すべきなり。

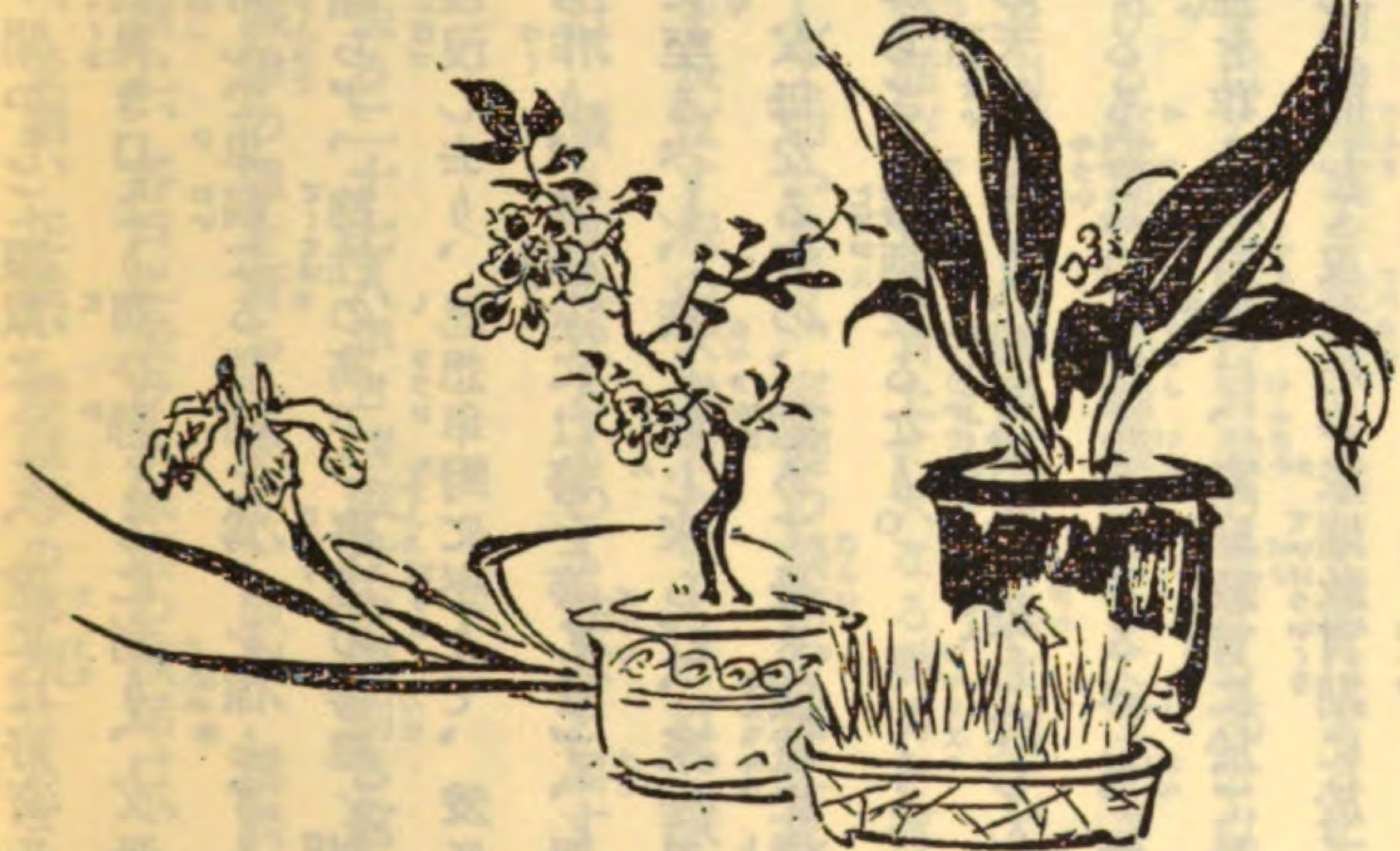
六月中の園藝

◎蘭と萬年青　開花するは本蘭なり、以て觀賞すべし、蘭も萬年青も宜しく梅雨を避くべし

◎蘇鐵　は中旬より野天に露出すべし

◎夏橘　結實眞盛り二十日頃まで接木、挿木、移植によろし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



◎檜　も前と同じく接木、挿木、新植に適す
◎薔薇、百合、石竹、石榴　共に觀賞によろし
◎花菖蒲　下旬まで觀賞に適す
◎石菖蒲　中旬より觀賞し又移植、根挿等も其頃より始むべし、根挿の法は、好む石菖蒲の根を凡五分位に刻み切り、これを純砂の内に挿し置く時は細葉を生ず、此期に至り便宜の木石に附するに際し水苔、小砂利、赤土を便宜に混合し、最初前の細き石菖蒲二三根をとり、其根に右の混合泥を附し、其周圍へ石菖蒲をつけ更に根をつけ之を止め、層々此の如くにして適宜の大に至らば鉢又は石等へ貼し置くを要す
◎牽牛花　早咲の分を觀賞す
◎枇杷　黄色を呈せる結實を觀る
◎紫陽花　七變化の花の有様を見る

社交一斑

流行の浴衣

流行子

已に單衣及帷子の流行を采し終りたれば今號には浴衣の流行を記すべし

浴衣には男女を通して記するかた讀者に便利なりと信ずるが故に男物女物の差別をつけず采すべしさて本年の新機は千代田絣、瓦斯明石等が重なるものにして價一圓二十錢より一圓七十錢、次は例の白さつま絣及瓦斯糸御所絣にて價は一圓七十錢より三圓まで次は瓦斯糸双子價は一圓二十錢より一圓七十錢、次は瀧川縮緬價一圓二十錢より二圓、次は瓦斯糸阿波ちゞみ、價一圓三十錢より一圓五十錢、次は唐糸のさらし縞及阿波ちゞみ、價五十錢より八十錢等

流行の柄合は絣なれば十の字、井げた、猫あし、キの字、縞ならばみぢん、萬筋、千筋、大名、子持、さつま筋等、大柄に至りては團十郎格子、瀧縞、かつを縞、棒縞等

中形は木綿、縮等に白地の紺の形本年も一層流行す、價は木綿にて八十錢より一圓十錢縮にて一圓十錢より一圓六十錢

夏の長襦袢

花柳社會に流行する夏の長襦袢は、質素なるものは絽縮緬又は絽縮緬を白のまゝにて用ゐ華美なるものに至りては絽縮緬を桃色、淡梅鼠、うす櫻鼠、鳩羽鼠等の幽禪に染め上げしものか、又は胴だけを淡泊なる幽禪に染めて裾と袖とをうす色の無地を染めなしたるもの大に流行す

湯具

無論三尺三四寸の縮緬を白地のまゝに淡お納戸色にて月にすゝき、光琳の桐、遠山かすみ、夜明松等の淡泊なる模樣を裾の方四五寸までに染め出したるもの流行す、(價三圓前後)これも重に一部の社會に用ゐらるゝものなるが普通の社會は年增向にて白、新造向にて紅の濱縮緬の一尺一圓以上のもの多く用ゐらるゝは社會が贅澤に赴きたる兆なり

夏帽子

本年流行の夏帽子を聞くに最も賣口宜きは書生向きの麥藁製俗に鬼編と稱するもの又は菱編と稱するものにて昨年は一般に鍔の狹きを尙びたるも本年はまた廣き方行はれ鉢卷は白羽二重ヒダ卷き又は紺若くは花色のリボン最も行はれ直段は四十錢より八十錢位なり次に商人向は麥藁の極上等普通形にて紺又は花色の鉢卷を附け直段一圓二十錢より一圓六

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十錢位まであり又當年初めて出來たる新形は羅紗の一文字形にて色は薄茶又は白く水色を用ゐ直段は一圓十錢より一圓五十錢位なり次に中流以下の紳士風を爲す人は擬ひパナマを用ひ直段一圓四十錢より二圓五十錢位又た最も上流社會の高等官若くは紳商連などは本パナマにて三圓より十圓位までなるものあり次に本年は臺灣行の人々多く此等の徒は大抵俗にナポレオン形にて上等はコーク本アルパカの上被にて八十錢より一圓三十錢位並製は燈心は毛繻子の上被にて六十錢より八十錢位なり又手代向きも云ふべきは白又は淡色羅紗のチョコ形と稱し一圓より一圓四五十錢位までなり槪して昨年に比すれば直段は少しく高し

夏向の髮具

近々夏の候となりたれば衣服の一變するは無論の事、隨て髮具に於ても一變せればならぬことも申すまでもなし、さて本年新奇流行の品目を擧ぐれば先づ櫛笄に於て

●●●神代杉の製品は本年始めて出でしものなるが夏向髮具の流行社會に第一等の位地を占るの望あり、秋草、龍田、萩、四君子などの彫刻に蝶貝をあしらひ或は上等に至りては眞珠を用ゆること頗る面白し（代價二圓乃至四五圓）

●●●黃楊製も本年の分は一種の意匠を廻らし雪湖刀の牡丹、菊最も人望あり（代價四圓半位）

●●●桐製は昨年より流行し始めしが、本年亦一進步を與へたるもの流行す、色は時代色にして古代花鳥よし

鐵刀木は必らずしも夏向のみに限られど、冬よりはこれからの時節に適す、流行模樣は菊まがき、秋草の古歌入蒔繪など

●●●シャチ製は例年の通り流行すること疑あるべからず、普通は無模樣、上等に行けば透彫刻又は源氏蒔繪の類

珠簪につきて言へば珠は白瑪瑙に蒔繪したるものか、シャチに淡泊の彫刻又は丁貝の平打の凸彫物、脚は丁貝かシャチか又ははし一ぬり、（京橋區南傳馬町大西白牡丹報）

流行の蝙蝠傘

追々夏向にも成りステッキ癈れて蝙蝠傘の入用を感ずる時節柄なれば今其大略を案內せんに先づ

男持にはケントン舶來絖、裏鼡色、若しくは綾甲斐絹にて八間骨護謨輪留のもの普通流行り上等はステッキ形絹綾なり

婦人持上等は舶來レース並物は丸形綾甲斐絹、紋織にて色はお納戸、柴、海老茶、上等物は黑地に紋樣あるものなり

小供持は相變らず紋織流行す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

価は男持ケントンにて壹圓五六十錢より貳圓位、綾甲斐絹にて貳參圓より拾圓迄婦人持は丸形物二圓位より參四圓迄の所レースは五圓より十圓迄

本年は一体上等物賣口好く三圓より五圓位迄の所最も賣行さの事、

（南傳馬町仙女香坂本洋傘店聞書）

雑録

婦人の世界

A B 子

○合衆國大統領の夫人　世界第一の平民國の事なれば、其大統領も從て人民に接すること多く、從て大統領の夫人の責任甚だ重く、云はゞ大統領の人望の半ば夫人の力にありと云ふ程なり。毎週一回大統領の官邸には貴賤高下の差別なく隨意に訪問し得るの定めにて、此日には元老院議員各州知事より肴賣の老爺新聞賣の小僮に到るまで、ぞろ〳〵蛇の如く隊をなして入り來れば、大統領は夫人と共に一々入り口に立つて、點頭微笑しつゝ之を迎見するを常とす。左ればあまり握手のしげきより、今の大統領夫人は右の手左よりも一入大きくなりて、終に片ちんばの手套を誂へしと云ふ程なれば、其の混雜も思ふ可きなり。こゝに此頃某と云ふ婦人ありて、大統領の夫人に面會せばやと、此公衆迎接の會に赴きけるに、前には花賣の老媼あり後には田舍ポット出の牛飼童ありと云ふ混雜にて、偖クリーヴランド夫人に面會はしたれども話す可き暇など到底ある可き様なければ打しほれて居たりけるに、夫人はやさしく微笑して「貴女の御姓名と番地を承はつて置きますれば何れ其内此方より御案内致しませう」と挨拶せられければ、某婦人は打喜びて住所姓名を告げ、其まゝ暇乞して歸りける。併し何千人と云ふ人込の中の事なりければ、よもや大統領の夫人が我姓名番地を記憶せらるゝとあるまじと、其よりは最早思

ひ絶へて居たりけるに、豈に圖らんや翌日クリーヴランド夫人より案内來り、喜んで行けば、夫人一見して其顏を知り其名を呼びける。人の上に立つ者は、此程の注意と記臆なくては叶はぬものにて、クリーヴランド氏が人望の如きも實に夫人の助多きによると知るべし。

○支那婦人の慈善　拜金宗の本家、金の爲めには支那十八省四百餘州はおろか、吾取りかへなき命までも棄つると云ふ支那人の中にも、見違へたる人はありけり。廣東の町に某と云ふ妙齡の少女あり。此頃漢字新聞を讀みて、廣西の饑饉疫病の記事を讀みて深くも心を痛め、父母親戚朋友等より貰ひ溜めし珠玉髮飾誕生日の進物を賣り拂ひ小兒の時より貯蓄せし金を併せて米貨三千弗を得、盡く之を右の饑饉疫病救助費に義捐したりとぞ。

○花の價　金に飽きたる米國婦人などの花（骨牌の花にあらず正眞正銘の色あり香ある花なり）に費やす金は夥しきものなりとぞ。此頃新約克の富豪の夫人宴會を開きけるに、食卓と客間を飾る花の價に四千弗を費やしたりとぞ。有名なる金滿家ヴァンダルビルト夫人の如きは、來客少なき平日にても、一ヶ月千弗位は始終花屋に拂ひ居れば、客多く宴會しげき時節は入費も思ひやるべし。「オルチッド」など云ふ蘭の花に似たる花は、一個二弗もすることとなれば、或婦人の此花を以て園遊會に食卓の上にさしかけし大傘幾個を盡く此花にて飾りしなど、其の費用の夥しきを知る可し。

○文學者の妻　佛國のドオデーと云ふは當時並びなき小說家にて、曾て「美術家の妻」と云ふ小說を著はし、美術家は妻もつまじき者との意を諷しけるが、其細君ドオデー夫人は誠に比類少なき良妻なり。初めドーオデーは假令妻もつとも文學好の細君は有つまじと心

に誓ひ居けるに、二十六歳の時今はドオデー夫人たる少女が白衣を着て其の園遊會に詩を吟じけるに心を動かし、終に文學好の細君ドオデー夫人となりけり。此夫人中々淑貞なる婦人にて、ドオデーの苦戰の生涯を通じて常に側にありて之を助け、夫の著述する時は、相談相手となり、之を批評し、改竄し、校正し、趣向を注意するなど、眞實ドオデーの著作は半ば夫人の賜ものなり。ドオデーも其妻の才に歎服し、之と協議し其批評を經たる後ならでは決して書を公にして公衆の眼にかゝることなしと云ふ。」トルストイ伯と云へば露國第一の文學者、思想深遠の敎師、獨立特行の君子として名聲四海に聞へたる人物なるが、其細君は日耳曼醫師の女にて、美人の譽あり。子供九人を鞠育し、夫の財産を管理し、夫の著作を助けて校正書寫の勞に服し、夫は文字を茍くもせざる人の事とて一篇の著作もまばし改竄すれば、「人生」と云ふ短篇の如きは、夫人の淨寫すること徹頭徹尾十六度に及びしと云ふ。此夫人も淑貞の德を以て露國に聞へたる人なり。

慶應義塾童子寮（下）

燧　闘

振興會。金蘭會。五月雨の友。

振興會は、寮生中、最も經濟的思想に富み、學術優等、品行最も端正の諸生之れが會員たり。金蘭會は、重に悲歌慷慨の士に富み、五月雨の友は、專ら風流の士を集む。會費は孰れも十錢にして、新刊雜誌等を購讀す。

◎運動會

陸上運動には慶應義塾春季大運動會あり、童子寮月次遠足會あり、水上には、慶應義塾端艇會あり、以て如何に慶應義塾が體力の發達に注意するかを想見すべき也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

春季大運動會

春季大運動會は、全塾の運動會也。此の日は社頭福澤老先生を始め、社中の紳士、皆之れに臨み、大人生、童子生、幼稚生等平素の膂力を此の晴れの場所に於いて、各人の覽に供す。時は恰も目に青葉、山鵑初松魚の好季節。

此の大運動會に於ては、大人、童子、幼稚とも孰れも大々的憤發にて、一ヶ月程以前より、養生やら何にやら練習に課業を抛つもの少からず。特に敵愾心に富む童子生は、此の會に後れを取るを無上の恥辱となし、賄に命じて特に鷄卵を添えしめ十分に滋養物を把り、朝な〳〵夕な〳〵運動場に出て、種々の運動を試み、平素朝寐坊を以て、寢坊頭と綽號せらるゝものも、亦未明に起き立て、澁谷村附近に駈足運動を試むるあり、又其の間際に至れば、洋服店に命じて、派手やかなる運動服を調へさせ、以て當日を竢つ。

愈々明日は其の當日となる其の夜の如きは、衆生皆一室に會して、明日の評議を凝らし、勇み立つたる人氣のいつ眠るべしとも見えず。暫時靜かになりしと思ふ程もなく、寮内は一般に騷しく、足音の際立ちて高きは、衆生の結束して早や運動場へと立ち向ふらし。

ボール、ジャンプ（竿飛）ハイ、ジャンプ（高飛）等は大人童子の區別はなきも、競走、障害物競走其の他の事は皆夫れ〳〵に番組の異り居たるなり、是れ其の膂力の差あるが故也。

童子生の競走は、幼稚舍中の年長者及び、通學生の年少者其の競爭者たり。童子生の意氣組たるオサ〳〵大人生をも凌ぐなるに、いかでか幼稚、通學生の先鞭を容さんや。眼中固より競爭者なきも、侮つて却て後れを把ることあらば、寮の名折、身の不名譽、果ては寮にも歸られぬ程の仕末なれば、孰れも油斷せず、軈がて其の番組みともなれば、寮生は競走者に向て、一同

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

喝采し、十分に勇氣を吹き込み、一二三の號令の下に走り出すや、童子生は、自家の仲間に向て、聲を限りに童子勝て〳〵と連呼し、其の敵とオッつカッつとなるや、殆んど死物狂ひとなつて、競走者の爲めに勢ひ付くる也。首尾克く第一先着となつて歸るや、衆生は、皆其の競走者を肩に揚げ、童子萬歲を三呼す。之れを以て毎塲童子寮撰出の競走者は、一といつて二と下るはあらず。

斯くて首尾克く勝を制さんか、會後衆生は、此の日のみ飮酒を許され居ることゝて、受賞者より醵金せしめ、丘下の町に走り、『いろは』『坂本』等の牛肉店に上り、勝利の祝杯を擧ぐるを例とす。

小運動會

小運動會は、童子寮月次遠足會也。多くは第三土曜日を以て施行せらる。會日の前夜には、皆會費五錢を當番幹事の室長に渡し、翌日の結束の爲め、町に下りて、草鞋、笠、脚絆、靴下等夫れ〳〵の必需品を求め、行き着く先きの遊び杯協議し、漸く枕に就けば、明日の樂みに得も眠られず、意氣地悪き少年は、早寐の輩を驚かしやらんとてか、石油の空函に、庭砌下の大砂利、小砂利を拾ひ込み、之れに繩を付け、長廊下をば、ガラン〳〵と音させて夜を徹するものさへあり。

窓の紙漸く白し、一同は起つて盥嗽し、賄所に入れば、賄は早や用意を整ひて竢つ。玆に飽まで喰ひ、兼ねて整ひ置ける握飯の辨當の竹皮包みを受取り、一ト先づ運動塲に出で、一同の玆に集るを竢つ。

竢つ間程なく、寮長來り、室長來り、勢揃ひ全く整へば、思ひ〳〵の扮裝に思ひ〳〵の物語りしつゝ、皆目的地に向ふ。

春の遠足は、飛鳥山、龜井戸、池上等にして、夏は玉川、秋は川崎、高雄、冬は目黑附近の郊村に出で、或ひは綱引、或ひは相撲、或ひは游泳、或ひは球取、處と季

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

候とに依り、日沒までは十分の遊戯をなし、以て興盡くる頃、徐々として引き返へし來る也。

一同は遠足より一ト先づ歸塾し、衣服を改めたる後、芝田町の海水浴に至り、終日の塵垢を洗ひ去り、玆に茶菓の饗を受け、十時頃まで、相團欒して、『ごろ〳〵』、落語、端唄等思ひ〳〵の遊びをなし、果ては打ち連れて、歸塾す、是れ遠足會の常例なり。

ベースボール會

ベースボール會は、童子生の最も得意とする處也。然れども是れ童子生獨自のものにあらず、只童子生之れが中心として、三田のベースボールを盛にしたるもの也。

會は課餘、常に之れを施行す。時として青山英和學校、白金明治學院等と競爭を試むることあり。

課餘日常の運動

課餘日常の運動は、重に運動場にあることとなるが、夏季は、芝浦に至り、袖ケ浦の清波に海水浴を試み、以て健康を養ひ、以て沂に浴して詠じて歸るの點也が風を學ぶも床かし。

端艇競爭會

慶應義塾に端艇倶樂部あり、端艇四隻を具ふ、童子生は常に之れを檣して、袖ケ浦をば縱橫に乘廻はし、以て素養の地をなす。

端艇競爭は、毎年秋季に之れを施行す。場所は、金杉浦にして八百メートル餘の處を一回轉し、以て其の輸贏を決する也。此の時も亦大運動會の前の如く、滋養物を把り、腕を鍛へて、時の至るを待ち、會後、受賞者が、牛肉をオゴルは、春季大運動會の時に同じ。

◎雜誌の事

雜誌を童子寮に發行し初めたるは、明治二十二年の四月なりき。當時、寮生の重立てるもの、兩三相會し、談、雜誌の事に及び、初めは五十錢一株となし、株式

組織を以て、一社を起し、簡單なる印刷器を購ひ、以て雜誌發刊の企てをなしたるが、事餘りに大に過ぎ、童子生の力に及ざりしを以て、再び思を翻へし、全寮に四冊の寫本雜誌を頒ち、之れを以て滿足すること〻なし、半紙版二十枚の雜誌を作り、標題を『寮窓週報』とし、以て窓友に頒つ。

役員、會費

雜誌に付、役員を編輯員五人、會計三人とし以て會員を募る、會費は金五錢也。

幸ひにして此の業大に窓友の贊助を得、扨て編輯となるや、最初は熱心に從事したるも、日の日曜に當るを以て、次第〻〻に倦厭を生じ、果ては一人を以て、編輯會計兩つながら相兼ぬるに至りしことさへあり。然れど記事の面白きものあるより、寮長、室長等の贊助を得、コンニヤク版より漸次進歩して印刷する事となり、會費を金十錢とし、標題を寮窓之燈と改め、月刊の雜誌としたるは、明治二十三年の夏也。

◎室換ひの事

室換ひは、學期の終りに抽籤を以て施行せらる〻也。此の室換ひに伴つて、室長も亦換はる也。

學期試驗終り、更に新學期に入らんとするの時、一同は皆寮長室に集り、各〻籤を拈む也。

軈て籤を拈り、室も確定すれば、各〻荷物、夜具、机等を擔ひ、廊下の雜沓いふべからず、扨て室に荷物を運び入る前、室長は、先づ上席に席を擇び、同室諸生を其の前に招ぎ、一應挨拶をなしたる後、復た籤を作りて、諸生の席次を定む。

於是乎、諸生は始めて其の席を確定し、大掃除をなしたる後、始めて机其の他を整列す。

童子寮内の滋味、決して玆に盡きたりと思ふことなかれ、此の樂境には、一種いふべからざる快樂ある也。然れども是れ容易に筆舌の横寫し得べきにあらず。只

だ之れを喫着せんと欲せば、身自ら三田山頭の人たらざるべからず。

地久節祝禱會

五月二十八日は畏くも仁德普き國の母君皇后陛下の御誕辰に當るを以て潮田夫人ちせ子等發起となり、基督敎の婦人等集りて麴町區中六番町なる番町敎會堂にて祝禱會を開きたり、淸楚たるこの堂の正面演壇の兩側には二個の大なる花瓶据えられて南天、芍藥、百合花の花挿されたり殊にそのうちなる百合花の姿のいかにも優しくて美はしきまことに王サロモンの榮華の極みにも勝るべき風情、御德ゆたかなる陛下の御心とも仰がれてめでたかりし。

午後三時梶塚夫人の司會にて君が代三度唱ふて開會せり、先づ新撰讚美歌第八十六番を風琴に合して一同うたひ次で司會者聖書テモテ前書二章「萬人の爲めに籲告、祈禱、懇求、感謝せよ、王及び凡て權威を有つものゝ爲めには別けて之をなすべし」云々の條を讀み皇室の爲め庶民の爲めに神の祝福を祈り百六十六番を三節うたひし後司會者は立ちて簡短に開會の主旨を述べ同番の四、五、六、の節を又うたひて殘る時間を會衆の隨意に任せられければ潮田夫人立ちてこの祝禱會の履歷と將來の希望とを述べられ又跪きて祈りたり又百六十六番の七、八節をうたひたる後二人の老婦人感話、祈禱をいたされぬ、はや時も逼りたればとて午後四時半第二百五十六番なる「わがやまとの國をめぐみ」の讚美歌をうたふて散會したり。

この日會するもの百三十餘名、諸敎會の信徒數名の外國婦人の外に東洋英和女學校、明治女學校、青山女學院、フレンド女學校、女子學院、等の女生多く會集したり、潮田夫人の演說は畧す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

赤染衛門（口繪のゑとき）

大江匡衡朝臣の子擧周朝臣重き病に罹り既にあやふくみえければ母なる赤染衛門大に憂ひて住吉に詣で七日間こもり居て子の命助かりがたくば 速に我命をめしかふべしと祈りし滿願の日

かはらんといのる命はをしからで
　　さてもわかれんことぞかなしき

と詠みて御幣にしるして奉つる程なく擧周の病癒えてけるに母悦びてこのよしを語る擧周大に驚き我はいきたりとて母を失ひては何かせんといそぎ住吉に詣でゝその如くわが命をめして母を助けさせ給へと誠をこめて祈りけるに神もあはれとみたまひけむ母子共に事なくして過ぎけるとぞ。

歌苑

、夕杜鵑

夕暗の枝折に來つる卯の花の影より出るほとゝきす哉

評 二句わろし

、。海邊雨

打けふる雨の中よりあらはれて磯邊に急く海人の釣舟

。述懐

呉竹の世ゝに光りをそへむへくみかき出さむ一節も哉

。梅雨久　　京都同志者　三宅駿二

里川の淺瀬も見えすなりにけりかくていつ迄ふり續く覧

、。同

今日いく日晴間も見えす梅雨にいつか晴らん人の心わ

評 梅雨をつゆとよむはわろし又はるゝらむも語格たかへり

。。述懐

限りなく嬉しき物は旅の身に親を夢みしあしたなりけり

評 實情いとよし

、。夕時鳥　　肥後　日隈寛治

三日月のかけもほのかにをちかへりなくか枕の山時鳥

評 枕の山は屋後の山をいふもその四句こゝにふさはしからす

。梅雨久

五月雨は雲間もわかす影のその永き日數を經にける哉

。述懐

ふみ學ふ道怠りし我むかし思へはいまのうき身なりけり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○夕時鳥　　　靜岡　伊藤紫文
瑞枝さすこすゑをもるゝ夕月の影もかすかになく時鳥
○梅雨久
梅の實はおち盡せとも晴間たに絶て久しき五月雨の空
○海邊雨
磯馴松こすゑに鳥のさわくなり鹽やく烟雨となりけむ
評　下句めでたし一二の句のつゞき調わろし
、。述懷
よしや身は深山隱れに朽ぬとも言葉の花は世に匂はむ
○夕時鳥
夕月のほの〴〵見ゆる山の端に一聲高く啼ほとゝきす
、、梅雨久
まこも草刈ほすひまもなき迄に降續きたる五月雨の頃
、、海邊雨
いつ迚も乾くひまなき海士の袖濡しそ添るけふの村雨
、五月雨久　　　沼津　槇　桃蹊
幾日へは軒の雫の音たえて窓にさつきの影かさすらん
評　さ月は五月の事なり月の事と思はれはいみじき誤なり
○夕時鳥
たちはなの匂へるさとの夕闇にほのめかしけり初子規
○。海邊雨
ふりしきる雨に烟りて海こしの島山遠く見ゆるけふ哉
評　見ゆるといふ方おもしろし味ふべし
○夕郭公　　　伊勢　田中君卿
卯の花の咲るまかきの郭公くれても夜としらてなく覽
評　おもしろし

○梅雨久
晴ぬへき日も近からん降初て久しくなりぬ五月雨の空
、。海邊雨
蜑の子か汐くむ浦の村雨はぬるゝか上に袖ぬらせとや
、、述懷
よの憂は人の身に添なれは山に入る共のがれさらまし
評　趣向めでたけれどかの「山に入る人山にても」といふ古歌に似たるは口をし

社告

本社主筆德富猪一郎愈々客月二十日を以て橫濱出帆歐米漫遊の途に上り候に就ては彼地にて觀察致候各國、各地、各都至る所人情風俗及生活の眞相特に家庭に關する事情は細大漏さず一々通信を以て舊に倍し執筆を勉め愛讀諸君に孤負せざらんことを期し申候今後本紙に如何なる新生面を開くかは紙上にて御覽被下度候也

次回歌題

撫子　池蓮
窓前竹　惜別

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第二 一語千金 定價五錢 郵稅二錢

歐米名家が、片言隻語宇宙の眞理を說明し、造化の秘奥を闡明し、以て誦すべく、以て歌ふべく、咀嚼愈〻精なれば與味愈〻深し、所謂る一語千金なるもの、此書が如何に有益にして、江湖諸君の愛好に投じたるかは、第壹一語千金が旣に八版を重ねたるを以て今更ら呶々を要せず、

今や部門、躰裁總て同一なる、第貳一語千金を發刊す乞ふ愛好の諸君一本を坐右に供せよ

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

速記法 自宅獨習生募集 月謝二十錢 二ヶ月卒業

規則書入用の者は郵券二錢を投ずべし

東京市下谷區徒町二丁目三十一番地 速記學專修所

國民叢書 天然と人 定價二十錢 郵稅四錢

第七版成る

發兌元 東京日吉町 民友社

第五版出來 最暗黑之東京 定價十三錢 郵稅二錢

國民叢書 文學斷片 定價十五錢 郵稅四錢

第九版出來

第一國民小說 定價十五錢 郵稅四錢

第二國民小說 定價十五錢 郵稅六錢

第三國民小說 定價十五錢 郵稅四錢

第四國民小說 定價十五錢 郵稅四錢

第五國民小說 定價二十錢 郵稅四錢

第六國民小說 定價十五錢 郵稅四錢

發兌元 東京々橋區日吉町四番地 民友社

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿五年九月十四日遞信省認可

「近松著作一斑」附錄

六月九日發兌

巣林子戯曲

定價金十八錢
郵稅金四錢

近松門左衛門が戯曲の價値は今更說くまでもなし此書は則ち彼が戯曲中珍本逸篇として世多く傳へざるものを擇び之を世に紹介せんと欲するに在りて其第一着に出さるべきは

大磯虎稚物語。曾我扇八景。傾城島原蛙合戰。大職冠。二人靜胎內探。持統天皇歌軍法。

我邦に於ける千古の人生詩人を知らんと欲するもの一讀せずして可ならんや

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

東京市京橋區西紺屋町卅六七番地